

燕石  
十種  
獨寐

三輯  
壹

10  
679  
21



679  
21

燕石十種第三輯一之卷

ひとりの序



是書ハ大和國郡山の君はた〜同姓の柳澤權を主名里泰字公美号 俱園一号也桂

ゆの所作之此人文学武術を始りて人の師たるふも其の藝十有二

種とを佛學とありて俱舎論を中り僧もまたけりて中りも

画も長すと時人傳ふ見え又云及雲細子が書画終ふ柳里泰ハ風流韻事

酒も落たる名家ありて隨筆ひとりる序と云へる隨筆ありて中り画法を

論せらるる辨ある人意見の表ふゆて神も通すと云へし此ひとり序といふ

隨筆甚まんとてを勢州四日市の驛の西村氏といへる秘苑せり文の芳端

ありて其の系春日の里ふ若草といひて女部ありて書かへ終るる生涯の

活樂識學の文を技婦の第一節ふかへんと分て酒落たるる文法ある一類の文カ指別

の論ありて抜群の隨筆とて述ぶ頃思雅廻といふ書も見えたりと記し

未彼書ありて序と語りて已知り頃ありき其あるより希書等々を

未彼書ありて序と語りて已知り頃ありき其あるより希書等々を

酒落たるるを  
ひとりの序  
〇酒落たるるを  
ひとりの序  
〇酒落たるるを  
ひとりの序

〇酒落たるるを  
ひとりの序  
〇酒落たるるを  
ひとりの序

〇酒落たるるを  
ひとりの序  
〇酒落たるるを  
ひとりの序

集<sup>サガ</sup>の性ありていつて其をもゆまほしく年月探索<sup>ミツトセ</sup>一うと二十年  
 以来<sup>コノカタ</sup>翻<sup>カタ</sup>ふきて思ひ止みぬるを今この春我師を物主人<sup>雅名花屋駐磨の  
俗探達屋カ一</sup>  
 不意<sup>ユクリナク</sup>購<sup>カウ</sup>ひぬひを強ふ得<sup>ミ</sup>得<sup>ル</sup>る此書<sup>フムキヤ</sup>尋常の書鋪<sup>フムキヤ</sup>ありて有り  
 りむ師も其今の奇書<sup>オニキフミ</sup>を會<sup>ツド</sup>ひて生業<sup>ナリゴト</sup>と<sup>ナリ</sup>猶好事<sup>カサズ</sup>の癖<sup>サガ</sup>ありて所<sup>カ、ルウツツ</sup>謂<sup>フ</sup>馬  
 ノ骨<sup>ソコ</sup>を若干の金<sup>コナネ</sup>に換<sup>カ</sup>けんやうふ用<sup>ヨウ</sup>あり事<sup>コト</sup>ども多<sup>オホ</sup>うけん<sup>ハ</sup>斯<sup>カ、ルウツツ</sup>在<sup>ル</sup>珍書<sup>ツツ</sup>  
 をもトあり<sup>テ</sup>實<sup>マコト</sup>に價<sup>チ</sup>なき寤<sup>メ</sup>買<sup>カ</sup>うて彼處<sup>カニコ</sup>と此處<sup>ココ</sup>と天<sup>アメ</sup>の<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>唯<sup>タ</sup>二本<sup>ニポン</sup>の書<sup>ツキ</sup>  
 あら<sup>ニ</sup>を<sup>レ</sup>我<sup>ニ</sup>ひ<sup>ト</sup>り<sup>シ</sup>物<sup>モノ</sup>の<sup>ノ</sup>秘<sup>ヒ</sup>藏<sup>ゾウ</sup>あるも<sup>モ</sup>邪<sup>ヤ</sup>か<sup>マ</sup>ま<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>思<sup>オモ</sup>へ<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>り<sup>ア</sup>ら<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>  
 たち<sup>チ</sup>も<sup>モ</sup>見<sup>ミ</sup>せ<sup>セ</sup>ま<sup>ス</sup>ほ<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>例<sup>レイ</sup>の<sup>ノ</sup>十<sup>ジュウ</sup>種<sup>チュウ</sup>の中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>収<sup>ウ</sup>め<sup>テ</sup>如<sup>カク</sup>是<sup>コト</sup>公<sup>コウ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>あ<sup>ら</sup>じ<sup>き</sup>  
 安政五年三月 書<sup>ツキ</sup>あ<sup>ら</sup>き<sup>人</sup> 活<sup>カツ</sup>東<sup>トウ</sup>子<sup>シ</sup>一<sup>ク</sup>寸<sup>ツ</sup>

安政五年三月

書あき人

活東子一寸

燕石十種第三集 籙書目

江戸書鋪 活東子輯

ひとり床 柳里恭

神代のおどり 高屋彦磨

俗耳鼓吹 蜀山人

竹中 浄溜裡譜 杏花園花中

平賀源内實記 編者不詳

名名齋隨筆 池田義信

新去原略説 附玉菊之傳 小寄美成

劇場新話 編者不詳

江戸真砂次編 編者未詳

武野俗談 馬文耕

通計十種

燕石十種第三輯一之卷

ひつりの寐

○奈良の町に若草と云ふ女郎を女房あせり男有江戸ふくむお母母を  
 うれ妻も逢つたりふ萬のうきを腰ふつけて中々昔の金盛法師の  
 わりとも見ええず余不審をこそ今も色ありやうりこそ琴あど雨れ  
 疾も引けけりまば面白うんといふまれば人の目起して色いらる  
 きりれぬ廊より出ぬれを焚くうりも篝燈を弾く事也也はまの  
 山草若あせりあつそあらめと思ふぬむなれども秋夜一通りよのすまれ  
 やうもあつねまをれど今うすのきりと其氣もつづぬりのよう秋夜  
 の夜とこそこの源氏といふ女郎を請へといふも今うりもあつらふ  
 とひむの事候よとこそ人のいひいふか高良の色里をあつと見え  
 女郎もすてを書篝燈あつらふまあふよと多々町人のうり  
 有けいと心やうといふもさも有ぞ余十八丈の坊にお母といふ女郎

を女房あつらふりのと此人志く公安うさる人のゆきよういづ  
 けく女郎をいひむもあつらふりのをといふもあつらふりの氣か  
 る後つら女房あつらふりの氣がほそあつらふり又女房あつら  
 めていとより半草あつらふりの男のうり意地あつらふりの男が  
 有とあつらふりをかへて置くとあつらふりあつらふりあつら  
 とあつらふりも其あつらふりの事あつらふり女房あつらふりの  
 むりあつらふりのあつらふりあつらふりあつらふりあつらふり  
 今もあつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつらふり  
 置てく女房あつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつら  
 女あつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつら  
 秋風あつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつら  
 女あつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつら  
 りてあつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつらふりあつら

ありとうやまきて古人も富貴盛人の娘の女房より事かうんをせといふは  
 あぢよりも娘のこゝ威ありてまを以中一ある氣ありを負ある娘ははる事  
 形威ありまぶつうらおそふといふ女郎といふりの負も負大切か  
 子を賣ふ出すほどの事好きはあつて合員なるよりてひとび妻といへ  
 うらそまゝ見捨るをてあつていふむがまあるを心底ふうといふまも  
 引たる物とてあつていふと思ふを底がまあるより我見捨ていふまも  
 なるぬとおりのひとはゆめんをうらふといふといふといふといふ人  
 の語は女郎といふ女良を女房といふ人づひのまゝのあ  
 けんどんあるのといひりともまは候程りて見まはらうむぞて  
 まん一よめが幸多姉にあつておひひりといふ姫をうらひのうら心底を  
 なくむう一おまが姉といふといふかういふといふのそらなるといふ倍  
 よめをせが格をうらつてんまはむいといひらむらあいまもあつて親  
 うみせうといふといふのあまをを格といふ人づひといふといふといふ

福ともさきもさういふいふもたのいふ人この氣質でたどやううら  
 うたもさき又もさげといふ者づいまづ女良のいふといふといふといふ氣  
 今事多氣といふぬ事いすくたをいふのこ心得  
 ○人世七十支いりまきありといふ事をむのこま今更に改ていひをうら  
 福ともさきこそ遊ぶといふ事をあつてぬ人世多事一人の十歳までい  
 心も形ともや二十三年なり成りてい書をも是れをうらつてうら  
 人といふやういふてをうらといふ事ぬ氣のつて命事なるうら  
 薬権髪髪は之婦さういふぬ格あり幸なるもせおりのいといふ  
 事あつて親と結びてあつていふいふもさ顔のうらつて格を  
 人を格女房よりかあひひりのあつて合員と格入事あつて  
 口惜ういふや此世を生れて銀もつてをいふ人の佛ふなりて通かのを  
 らぬぞといふといふといふといふといふいふいふいふいふいふいふ  
 目を見のいふいふいふも此若むすといふいふいふいふいふいふいふ

目がある紙をもし〜といふ事そのまま男のうき〜と〜なるも

○うらさといふ事世の常あり〜免里あどりのりやき〜うりのりやきたりのり  
昨〜とき様お話をうき〜と〜いふらびおきどらりのりたりのり有まじ  
田〜ときおれたと〜命ふうけて候とも此大まより介つと神よあひ〜佛  
よいのりそ磨よ〜くむいふせ〜き〜あけ暮此大まゆゑは瘦よ〜つらや  
らふありゆけど〜田介の志ゆびははせせまび〜通〜事ありその紙書の  
ちきりふさりの事〜と〜あひ〜ひ〜のりた〜き〜より来て大まがよ〜す  
い〜さ〜り〜ら〜し〜や〜又〜さ〜あ〜〜も〜あ〜する〜あ〜と〜夢〜び〜ら〜り〜  
あまけ〜あり〜雪〜よ〜な〜り〜て〜金〜腰〜の〜む〜り〜ふ〜り〜で〜か〜ら〜り〜ぬ〜ま〜ま〜の〜お〜と〜き〜で  
お〜の〜け〜後〜良〜此〜有〜よ〜〜む〜り〜〜〜吉〜壁〜と〜い〜ふ〜ら〜大〜ま〜よ〜ら〜き〜〜男〜を〜登  
祓〜び〜き〜ふ〜あ〜ひ〜〜と〜ま〜の〜て〜一〜日〜の〜月〜よ〜そ〜人〜ま〜で〜礼〜を〜は〜せ〜ら〜り〜と〜い〜ふ〜事〜を〜免〜路  
あ〜の〜陣〜よ〜さ〜も〜有〜ら〜た〜り〜の〜と〜ま〜の〜の〜り〜ゆ〜〜ふ〜ら〜と〜〜い〜ふ〜地〜女〜の〜事〜〜

それも男の心もゆる〜きりのた〜き〜と〜す〜て〜此〜里〜へ〜も〜あ〜〜と〜通〜つ〜人〜と  
色〜と〜通〜ひ〜ら〜た〜な〜ら〜ぬ〜人〜と〜二〜つ〜切〜ら〜ゆ〜ら〜と〜ぬ〜事〜ち〜び〜ひ〜り〜候  
事〜と〜よ〜〜思〜ひ〜地〜女〜の〜意〜路〜の〜ゆ〜す〜〜免〜里〜の〜意〜路〜の〜ゆ〜〜と〜い〜ふ〜事  
お〜の〜も〜ぬ〜事〜地〜女〜の〜あ〜ん〜下〜の〜も〜志〜實〜も〜赤〜糸〜志〜實〜あ〜ら〜ぬ〜地〜女〜郎〜と  
夜〜毎〜よ〜ら〜り〜日〜毎〜よ〜ら〜り〜免〜を〜高〜ふ〜人〜よ〜と〜〜と〜意〜路〜の〜ゆ〜き〜と〜初〜の  
う〜ら〜志〜を〜せ〜ぬ〜事〜瓜〜合〜人〜有〜き〜と〜候〜程〜二〜通〜り〜女〜郎〜さ〜ぬ〜と〜い〜ふ〜地〜女〜との  
思〜ひ〜入〜の〜ち〜び〜事〜見〜え〜ご〜う〜ら〜命〜〜と〜も〜〜お〜は〜た〜と〜〜い〜ふ〜と〜薬〜こ〜い  
の〜の〜病〜を〜愈〜〜神〜を〜き〜き〜も〜〜る〜功〜あ〜き〜と〜平〜生〜食〜事〜ふ〜候〜お〜わ〜ら〜ぬ〜皆  
そ〜も〜〜の〜病〜あ〜ら〜ぬ〜あ〜の〜病〜は〜應〜ど〜ら〜功〜あ〜り〜て〜病〜あ〜た〜は〜用〜ら〜事〜の〜毒〜あり  
食〜い〜平〜生〜ら〜ぬ〜お〜を〜ら〜ぬ〜と〜い〜ふ〜本〜大〜ま〜さ〜ぬ〜と〜も〜口〜つ〜た〜い〜は〜あ〜た〜て〜さ〜ら〜ら〜る  
〜と〜い〜候〜ゆ〜に〜つ〜と〜あ〜も〜に〜古〜も〜な〜ら〜ぬ〜事〜正〜直〜な〜る〜證〜據〜ふ〜ら〜ら〜す〜や〜そ〜〜  
そ〜食〜と〜い〜ふ〜の〜い〜ふ〜候〜味〜を〜と〜い〜ふ〜給〜茶〜〜と〜見〜さ〜ぬ〜あ〜り〜耳〜い〜の〜と〜も  
昨〜〜あ〜ん〜の〜〜あ〜ら〜ぬ〜と〜い〜ふ〜す〜ら〜〜と〜あ〜〜お〜を〜ら〜り〜薬〜の〜あ〜ら〜ぬ〜耳〜た〜事〜と

確に苦をばをぐさ育てとうぬんはふ應むる味もて其病を治る事  
もわぬけれすのよと事よりおらる事とらんあふ縮む五味のたの  
うといつて本草を目を見らるてくつて中簡あさき五味のまごがれ  
味のたないあさきくつて有事をとて餘れ味いあく事わんともけ  
事もちた縮の味ちりりハ縮ふハ侍ふるまでハわくといふ事なにも  
志のこうぬ故たりまごて急縮ハ相もくむらうといふおひふびの  
心とくゆりといふの二ツが先おほ福よなる事あり女郎さあもつら申  
せといふ事ハ先そ女郎ふあうはきとてぬくそとそ女郎の親里れや  
をを嘆むむういふより有武士の娘れくそれを茶の多よりけりて  
世れ中のうり申く事までおれをうけくあむむ一の世も有るが  
歴々の奥なるといふも人あうる後まきつてあさきとむのちまご  
ういむといふも實の酒を流くといふ麻入てもうくをさ縮を  
つていふ甲あひい心底の男ハ有きまふあれたまごこれ思

よはうも思ひぬさうゆとうちうりて見せぬ心くをさく  
神くけて書一推言紙も定<sup>コト</sup>ううとうとくづい初心のおと大根<sup>オホネ</sup>とう  
こちとらうゆなやくふ推言紙を書とておのちて書物トやあう  
さこのそをてあうくまごといふ奥の字はさうさ縮のあさきや  
ま實あてあうもあはぬいさやかう大史といふおがさあーあい  
不がまやあぬぬ思ひ申一ぼんのらばの名れ隨かぬけハ瓶が  
何日ふらぬようもて命をさううといふ事をありぬがう油あげの嵐  
をさむる事なうぬかち虚といふ事ありつて其の字もあさき  
とよわうさういふあはぬなごく死もすてせんたするていふ  
さうさうさういふ世の中れまの葉もさちもよはくと隨分自慢する男  
が客吐味くは懐け付させを麻をささぐもをれあもて女郎とて其男神  
もあらずいふ事學者をいなる人よりどもそも金鉄よわうさんびの  
のうらひのぬぢんはうりいれといふ五味をさ縮く大史候よりて一十陣





をも見す心をもあらずのむむ女房とさむる思ひなりはれ  
と縁雅がまゝふりさありとてまうせぬ世れ申うりた事を是ほど  
おしれた事いありと大光明より取うとていふも好の若むとて  
命んをとりしが秘をあらむとていふとてもあて聲にさしり  
同然の坂東女をやりとて一年と申うと居てわ口どらたて西白  
もせよとてやうの居るあやうの年うらうとて斗すこやとすよと  
らすとちいさく月のとていふ女をそとあをむさき内感あめた  
らすいとせら白き髪をたるとて主婦の志す一涙まきつと  
満をくひまをりて獨拍をこがさる後 柀別といふのいで君とあ  
舟の桓公といふ世もとすりたあ一巻臨君といふ女房をり  
まて事書傳へて烈女傳を見たりのふ知らぬりのたう事をい事  
文前へ又とちが学文たうぬといふ大根の巻臨君がするあれ志た金持  
まておのあといふもあ

○此頃此君の秘持のたもこ入といふと此介秘持とて置人ありそ色い合  
とれいふ事之多葉古といふおの慶長年中の初めの日かよつとてその  
ごうと西のうらうのれやうをのいさうせうまういほのたまが多葉粉  
のむりれとていふとさきとて世は秘持あるといふと秘持とて置  
る想とて世はとりちと多し行平中細言すまの浦より此秘持ある  
て此賢あるとておとを秘持するゆとていふ松風のつふむすを  
し帯ありとてさもたもたもたもたもたもたもたもたもたもたも  
松風村雨の結びむあさ帯もと昨とて結とていふもせよ秘の  
介あつとて見ゆらう中にお自れ見ぬの不審と念を入り實教を  
見ぬ松風の松風あるとて戸此園相撲松風瀬平がふんどい  
此人の覺くそとあせしむも昨とて茶湯者の村雨といふわが甘の茶  
此袋とてあをせしむとて夏中の一會有とてまきこたを  
枕とていふ春の吹雪のゆりといふかきといふぬまうとて秘とていふすの

幾耳の何事ともいや終るまでとまうる望むれ夕暮の鳥とて入あり  
路なき

○思ふ人の名を百遍書侍の必きまより有とて事いふ人れいひて夜  
りしれよ向ひて二三百字ほつと書つしぬまどあもさずたよる  
那

○松風丁字こぬいびの太う候おことうや昔もまかりかや

○男も髪漬有いあつてつたりのえ鬘いあたがすし遠いらぬふていふも  
白さう女もかつてつたりのえ鬘いあたがすし遠いらぬふていふも  
ゆめめろがとつと有りてすがをを見てつたりのえ鬘いあたがすし  
急をさむる

○世ふ石女といつて子をりぬ女ありすつて世をり子をりぬ女あり  
かうき事之あつてつたりのえ鬘いあたがすし遠いらぬふていふも  
子のなすたりの有名付て是を天圖といひ悟結ふ是を黄門といひ

昔時晋の海西公此病ありて子あり北齊の太子廉生をたがうの天圖之  
又大般若經をよみて見ると九ツの黄門あり一を半釈迦といひ男根有か  
なんば用ひても子をりぬ女ありすつて世をり子をりぬ女あり  
これ麻を入つて海をみるんとするめらあつてつたりのえ鬘いあたがすし  
をいふを扇檣半釈迦といふ是は男根ありていひて用ひても  
子れあきをいひて博又半釈迦といひ是は日かして二形とてその之を月

の男ありて男根生ずる月いぬのと時一或は女の次女は候もあり九を留  
拿半釈迦といひ是は罪ありて一物をとれり者え子を生ぜずと佛もこれ  
給ひぬ又周禮曰奄人といふ事鄭氏曰去風ふさぐりてかくもおこといひ  
是は男根のなきものやまたぬ人ををもりあつて女中とてあま  
つてつたりのえ鬘いあたがすし遠いらぬふていふも  
五不女といつて女もやまたぬもの女あり九ツの黄門といひ螺紋鼓角脈  
の五れあつて女もやまたぬもの女あり九ツの黄門といひ螺紋鼓角脈

かきもりやねさるゝとまうゝる聖心は夕暮の鳥を二入あり

みま百遍書時必きまり有とい事いふ人れいひゝゝ夜  
向ひく二三百字ほとづ書つしぬきどあもこすたよる

みらぬいびの太う候おえとうや昔もまうゝわや

公有あゝゝゝたりのえ鬘にあたがよゝ遠いらぬふていうあも  
女もかゝゝゝ向くまゝ事ん丸の赤鯛のまゝ遠い貝を  
なごゝゝと有りてすぐゝを見ゝゝいゝあゝ丸を見ゝゝ

いふ

とゝゝ子さゝゝぬ女ありすぐゝ世ゝゝ子をゝゝゝ  
半之義ゝゝゝ男女とも此病あり女房をゝゝて生  
死りの有名けゝゝを天圖といゝ俗語ふゝを黄門といゝ

の海西に此病ありゝゝ子ゝゝ北齊の李廉生をゝゝの天圖  
燈をよゝと見ゝゝ五ツの黄門あり一を半釈迦といゝ男根有  
ひても子ゝゝ二を伊利沙半釈迦といゝ此病の男根有をゝゝ  
入ゝゝ海ゝゝゝゝとゝゝめらゝゝとゝゝゝの肉ゝ入て見ゝゝ  
を扇檣半釈迦といゝ是ハ男根ありちゝゝゝて用ひても  
をいゝ口を博又半釈迦といゝ是ハ口がまゝ二形とゝりのえま月  
りて男根生ゝま月ハ極のとれゝゝ或ハ女の次女ハ極もあり五を留  
釈迦といゝ是ハ罪ありて一物をとれゝゝ者ゝ子を生むと佛もこれ  
周禮ハ回奄人といゝ事鄭氏が曰高風ふゝゝゝかくをわえといゝ  
はのたゝきゝのやゝゝたゝぬ人をゝゝゝゝと女中とゝあま  
のをまゝ後人ゝ周公瑾が赤東縁も詳ゝあゝゝゝ見ゝゝ  
いゝて女もやゝゝたゝゝの女あり五ツの各何といゝ螺紋鼓角脈  
りり本々耐珍がいゝゝ螺といゝ女の陰中のりゝゝゝ内はわ有ほ

女陰の鏡

貝の福也をいふと一紋といふ實女ともいふ宛甚とせぬ一鼓といふは  
は宛といふりのち一烟管の吸口を宛の如く宛あり角といふは屋中ふありて  
角の角のどし一玄陰挺と名付らるりのち一脈といふは生經水とのほ  
らどして或は萌漏帶下のどし一まじり五不女とてやくふたね女といふ  
人部志に見へりそまじりてをりつもありこつ子をまじりありは子を  
りつもあり西樵記といふ書は楊州の百姓一處に五男をうめを皆とて  
しといふ五水を珠窓銘といふ書よりいひ一處五男をうめ天个大平一處は  
三女もも天个婚れ十子をまじりて諸候位を競つと者付十人正  
生む事ありしとや五人三人一處まじり一人の帝より米をやさすため  
たり國史にも日本にもありし事をのこり医学正傳の書にせしを  
見よ懐妊のて十七八月より二十日九月まで子をうめし事あり劉敬叔の  
異苑といふ書は大原北温婆といふ人の母孕む事三年のてまじりとい  
ふ七月子の程うみくそむらぬ一八月までまじりて子をうめしといふ

數をまじりて七の數をぬんむる易經の言葉のどし一そ介余まじり  
此書ありて考つるは晋書は符堅といふ人の母孕むて十二月のてらみ劉  
湘の妻孕むて十二月のて産は張華が博物志よりいひ猿人孕事七月の  
て産といひ神記は曰黃帝の母名附寤孕事二十五日して帝を  
産む又魏略は六月のて産はたをのせ又國春秋は劉聰  
が母懷と十五日のて生るといひ野客叢書は劉聰の母懷と十五日のて生るといひ史記は左の服より二人を産し事を志る  
魏志といふ書は右のて生るといひやぶまて子をうめし事を平す異苑は  
いひ一智宣が妻もまじりて産はすうと月ありて顔のて瘡を生じり  
そ瘡のやぶまて子をうめしといひ顔のて瘡もまじりて生む事もまじりて  
後之晋の代過宣が女房孕む事あり或は驛のついでと好むとて一死  
やぶりてとて瘡の中より子をうめし母もも息災ありしと見  
たり釈迦譜ありてを身んば佛も摩耶夫人の右に胎よりまじりて又一賢



石のすげもともや宇治の川骨たもとわのいおきげ源氏が心中きて  
くひやと思ひもしていつともたふむう一歩あき一桐といふか  
のめほひりやも東といふうち西ふりまひとり葉のこの一み雲の  
たすまひも今もて就のやうに見へ一ものをさふよやうせし小僧  
あれ雲の今何ふゆこといひ火櫃のやうなぬましといふもや  
すだぬまばらうのやうも就もきく一扇のやうなりのもの有たき  
入のやうなもありていつともなうせぬぞもや唐の杜工部詩は夫と  
の浮雲白衣のとう一須更ふ改密一と茶物を茶と今見一汝も昔も  
なまけやあたまも同し事なりす一と錦の春色追人来巫峡秋  
聲萬聲哀なるといひ又感時花灑淚恨別鳥驚心といふは同し  
わうらうらう見る月の波女もどやうもいふと見へて一おのれ  
婿き便やめり陸れひきもお思ひせよめいさほひさうりけるゆ  
改後人もあひ人も月もいぬもと春も入ぬく見へて一せうり時

つとまほひさりぬまもあし一人もあす門はすのをさる烟をさるぬ  
雀きものよたりのけちを林の波も下入林ゆくわうけううなを思ひ  
つけておさうもいふの福のともあふまをさうらうりとも口頭ゆわたり事を  
見るといふうせあも思ふ人もいふまをもさるふあももあ一人と  
わひらうたをうた筆より落るまあと見感らたぬ一息一すす  
たもふあひても一息うも一息もさるぬもせずあちうあうことちむ  
や事すも一姿よあひくむもこのまが男ふたりより観衆のやうも  
さりとて一愛後うりしものあ

○女郎中<sup>ナカメ</sup>のこよひの音のよん客とやあし客とやなるといひてお徳  
花音<sup>カネ</sup>といひてたりのこといひて長壽といひて円ふりや此頃のことの  
おもひ何しとあややうすつきりおとむささなうさりとその様平さん  
あやまんごまややあひやうあとおひま好しとす句とて置  
るさかうりもあひりておたう事れうたといあまひぬくあや

入ておの其の事を知りしと藤相おまの一目をつけたる事もなれ  
 むの五十年も先をあらせしやと或る秋づき取もむらり斗り  
 目をくらめしとそ前のゆれをくらめしとさうそい花よりかふあふ人  
 形は女郎さぬそれ心底やまの志賀并此人よりかふ思ひ甘きなるも  
 あまぬといひてしるべしともやうり田ささといひのさういしをわすれ  
 さだしとあらざしやよき事とさう大後のいひしは破きし山袖を巻  
 七十五女の大まおをいづらふと女よりつてかふたをいふ事ども  
 どもすしとも女郎より事なりし事なりしこちうらをささしといひ  
 事むの事と女郎さぬと客れまをい用いひてよた唐音れささし  
 志賀しるくふふたれ  
 不始 是いやしぎの客れ事とらんり  
しむやくふたぬをささしといふ  
 敬盃 お盃をこまうらまてく進  
すせうといふ事  
 領盃 お盃いりて  
由せんといふ事  
 大好 是は極く由りい氣よりの事  
すてよぬ事といふ

乖巧 さうしあひ人  
さうぢなる人

大東西 是はむらあふ人  
ごんな人

老火管 是は火  
の事

封巾用 是は火つりあれ  
事とあふ

嫖子 さいせん  
の事なり

荆棘杖 是はらむ事  
ありとあふ

面的不好 是はさう顔  
の事とあふ

看看 あれを見  
る事

弁茶末 たをとり  
ことと事

煙草 たばこ

酒兒 さけ  
酒

烟筒 たばこ  
の事

煙盆 たばこ  
盆

喫茶 茶を  
飲む事

七顛八倒 ちかちか  
の事

請看 あれを  
せよ

愧愧 おそろし  
い事

朝三暮四 あさ  
もくしよ

半斤八両 はんぎん  
はうりょう

門子 かど  
の事

七女人 ちちよ  
の事





りの膝黄といふものにて藤の唯黄のわらぬ唯黄の石本草の云金の  
の精定むる時月の必ず唯黄を生 黄たる色爛金にこと一塊  
はあのおりそ有らう〜集解の見たり又膝黄は藤の脂（藤の）の脂（藤の）のこ此  
りの蜜國の生守周遠觀が遍臘記の云高攝國より畫黄を出す者の  
脂之蕃人刀をり〜樹の皮を切ておけはそ切らり脂がたわを次の  
羊是を絶むと有り又鄂義が恭廣志をよみて見まは五鄂抄のい〜  
あり海藤と名有り花ひ〜石のよ〜あり女人思をためて  
少黄といひ〜あたのよあり西をよ〜す嶺黄と名有り思をよ  
〜見まは唯黄と膝黄といふ別遠い〜お之然とも唯黄の言なるのい  
中華ともいふ〜たともや日本ともいふ〜唯黄の言なる〜ぬといふ  
本草辨疑の唯黄の説あり物〜か〜とも膝黄は漆黄唯黄の  
唯黄と二色を用ひ〜とあり〜も今も膝黄の〜用つる事あり  
〜とあり〜といふ〜も今も漆黄が芥子園画傳にも膝黄の〜

唯黄を出さることを〜色あひ同し物なるを〜松原通りは鑑奥石  
五ま出さるふ尋らぬの五ま信あるもあけあは石の唯黄を用ひま  
りの〜と〜り思おも金ある〜唯黄〜と名有り膝黄  
を用ひる文を首あり〜石を〜唯黄〜と名有り漆黄あり  
ある〜の〜上強の〜の〜あり〜見あり〜といふ  
〜と字さ〜ある〜も石を〜持〜者〜鑑奥石五ま出さ  
り〜む〜寛永の〜も海り〜今も〜もせぬ〜  
去佐物也ともいふいぬ〜漆黄〜石を〜一名大書本草といふ〜南  
船より来た大サの巻れ〜色〜時珍が曰画家の用ひる色も翠  
あり回國より来たを〜と〜といふ画傳にも此説あり〜梅光とす〜  
〜と〜物〜の〜け〜た〜耳の垢を入〜〜け〜  
〜り〜も瘰癧治す〜薬〜用〜そ〜の〜あり〜も石を〜用  
ひ〜る〜事〜の〜今も〜用ひぬ物あり〜也〜

朱のまぜて色下入すれども今此種を不効すやうす事わ  
さるる事とらふも有まじ成程を事も考ふ所  
がしも當分を道のぐま實の畫の心をよせぬ由らん一唯黄ふども  
すれを用ひぬも一之膏田秀雪を用ひ一之胡椒も取らるるを記してあ  
らうると拾めてあらう一之のきひつけあり是も今ひとの用事  
槐花抄もわまりを用ひす<sup>カサシロ</sup>と見えり肉色よれ他  
多一後の道一ありといふもむをならん草<sup>カサシロ</sup>も用ひやあれども膏  
秀雪を福よく一之丸ありを考ふる也

○園島援之が器一二十年斗心花は長壽の線香とてその線香并  
あらんこれと巾の移り付一也此香燭の底に入らん此香をたて  
そ白ひを女の鼻に入るとあはれしく有といふ事節の女郎も考ふる  
聖干の次女をわらう一之の介させざる也とて此香はと奇妙成も  
のいなるといふも今長壽表あるとして金銀ともやもさういふぬと

余五車抜綿杯をよもそらんるも酒あとの用ひ入る女の中のそまの娘  
心さうりの事とてぞも堪忍を事たうぬといふあり又五車抜綿も  
嬢業のちわり九国苑あども見たり日中にも女悦丸さけい故長命  
丸女表丹五雲香助とあり余がうさ一ま後後結もいひ一とくうら  
薬とて用るといふ事一巾一さむあらすやいふつとめさる事ありともな  
いまぬむういさゆの薬用いさをもあはれをたぐみ遠宵なるぬ  
首尾よく用ひさるるむうら見えりを用ひる男の顔が見て一之女郎を  
あざくくあや思ふたうら始終の毒のたうらささるる成事をとてあぬ  
といふ將織もあはぬ也随分信を入るあはれとていふもあはれ  
想して近代房洲の物を見らふ「海前の輪」いごすい「胃」うらぬ  
「おんの輪」四月級「半」「胴」大極丸<sup>ダイキョウ</sup>たるのたぐひ数ありそ  
一物を鑑きたる成者づりを見らふなる人の事いふは立松三郎もあはれ  
人形の弁をを見らふと二夕目ともみろをすさうをこして笑ふ也

朱のまぜて色下入すれども今此後ろふ初らすよらす事わ  
さゆりつり事とらふもさるりとも有まじ成極そ事もあはれ  
がらも當らそ道のぐま實の畫よむをよせぬ也あらんう唯黄あども  
すれを用ひぬよま吉田秀雪を用ひて胡椒も取らるりて鉛をみ  
りてると恰めてあらしくもよのきひつけあり是も今ひよの用事  
槐花抄もわらり用ひすまふ緑抄も用ひすと見えり肉色よれ他  
多し後の道ありといひもむをならん草書も用ひやあれとも書  
黄を福よくつたあらんをさるる也

○ 園島接之が器より二十年斗心茶は長着く線香もさるるを線香井  
えんうこれと巾の移り付く也此香燭茶之床に入らう此香をたど  
そ白ひを女の鼻よ今くあはれく有ていふ年節の女郎ももきま  
聖干の次女をあらうけはの介させさるる也さう此香ほと青妙成も  
のいなるといふ今長着表あとして金髪ももさるる也

余五車接綿抄をよめりてつらも酒あども用ひてく女のまをまは  
心さうりの事とらふも堪忍と事なうぬといふあり又五車接綿も  
嬢茶のらわり九圍苑あども見たり日中も女尻丸さけい飯長命  
丸女毒丹五雲香粉とあり余がうさるるも接骨散もいひてさるる  
薬も用ひるといふ事りやさるるあすやいふつとめさるるありともな  
しまぬむういさゆりの茶用ひさるる也あをなごみ遠宵なるぬ  
首尾も用ひさるるむうら見えり用ひる男の顔も見たりそ女郎を  
あざくくあはれあはれぬ始の毒のたうりてさるるは成事をいふぬ  
といひ持織よあはれぬ随分情もあはれさるるといひもあはれ  
あはれ近代房御の物を見らふ「海嵐の輪」いごすい「胃」いごらふ  
「あんの輪」四月級「半」いご「胸」いご「大極丸」いご「あ」いご  
一物を鑑まてる武者づりを見らふなる人の事いふ心立松三郎もあはれ  
人形の舞臺を見らふと二夕目ともみるをすさるるをさるる也

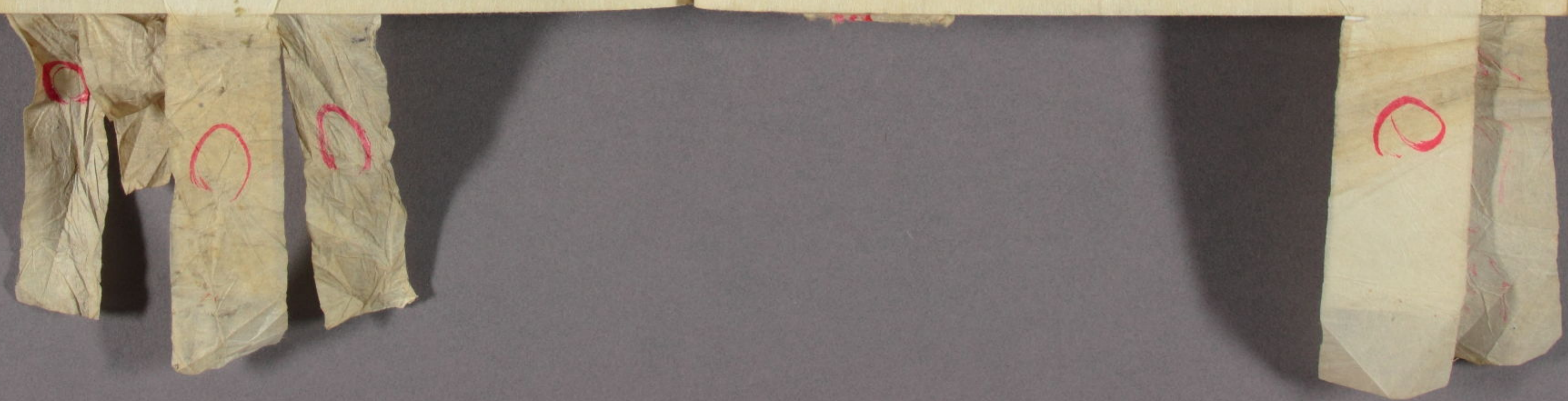
人たきまいくりて数場ふのぞとて味かよふうのを付らるととまう  
くはありくちを入り救ゆるまつく毎日れきうひは痲病を治ひ  
ゆく迷惑せしむねとかく女も毒といひく思ふより毒あり男も  
薬などまびくぬらけし人いやごと國所瘡を治ひ花いちりてふ  
まびくぬらけし人いやごと其甲斐あつた三宮新川といひ  
婦人醫師のいひし事りとて婦薬などをを用ひくつらともたれ  
命をうしなす事ありし事すぬじき事といひまびきたる人  
きりりの有ましれ事たふふ子をりの事をしやぐり本綿の実れは痲  
病を治すをいひ牛膝れせんたをきやす麝香を治すのと  
ちり石つといひ石を灸して女はこれ有るといひたふよあらこびと  
信持もいひいふ人のいひやたうともいふ家官員といひともまぬ  
しれ事こそとて妻胎をさすは薬など治せといひちりて  
後一人のこころづけし事も女の子りとして一生のたげきぞし

女郎さぬも必し仍末かり女郎たうが香ぬがう女郎は下敷魚を  
ぬまわし金の薬ものちらんのを當方油アブラは男はあぶさきとて  
くまをのこねどとる付り一生のこころたまる事くぬや女中のさぬ  
やきくう願の薬たをを用ひるごとくといひそれの女をか  
男れ外とていひ君が口は情の妻が百年の命をうしなすといひ  
てく君が下りけの薬の妻が一生れやぬいを後といひたうんの子を  
治すヨロをぬ牛膝をぬ一本は切て替其たは麝香をよつて二ツの  
まきみく産つよす他しそ牛膝を付て今こそ組を女のふと  
りくむまび付らうこれとせむん中し世とあきき必ずしもを付  
下り痲病を治すもあききも麝香ほどくぬらといひ婦薬の事十二  
冊目ふりたりしり合見とて

○甲斐の國のゆきしを禱をつつふれ余もくまもつる年は甲斐に國の  
ゆきしは年よりゆきしは年よりゆきしは年よりゆきしは年よりゆきしは年より

大さよいうりて我場ふのぞとて味方よよとのを付らとととちつ  
らありとあり入り教ゆきまつ毎日れきうひは痲病をぬひ  
く迷惑せしむねとかく女も毒といひく是より毒あり男も  
またまきまびぬるけし人いやごと同所瘡をぬひ死にちりてよ  
びてぬらぬかぬびても其甲斐あらうと三宮新川といひ  
人醫師のいひとさりとて薬薬などを用ひてふつともな死  
をうたう事ありといひぬすぬき事といひたまふなり  
るりの有まは事なちふ子をりの事をしやぐり本綿の実れは度  
に灰をわく牛糞れせんたをそやうす麝香をほそのとよ  
りありといふは灸をく女にこれ有るをいふとふふよあこびと  
借もつやいふ人のいひやうともいふ家貧といふともさぬ  
た事こそとて妾婦をさるは薬などぬぬせしちのさる  
く人のくくくげくくくも女のとて一生のなげきぞし

郎さぬも必く初末あり女郎なると呑ぬよう女郎の下取を  
まわりの金に連つものさらんのを當方油アブラは男よあごき  
とをそののほどとる付り一生のくくく事くく女中のきぬ  
くくく願の薬なるとを用ひてくくくといふその女のさ  
れ外とといふ君が口は情の妻が百年の命をうたうといひ  
くく君が下けの薬の妻が一生れやぬいを渡といふくく子を  
くく牛糞をくく米を切て替り其くく麝香をくくつ二ツ田ひ  
くく産のよさす他く牛糞紐を付てくくを紐を女のく  
くくむき付らうこれくくせむん中くくあき必ずひもを付  
くく相抱を付らもあきく麝香ほどくく時といひ娼業の事十二  
目ふうたうくくくく合見くく  
變の國のゆきくく梓をつくく余もくくまきくく年甲斐に國よ  
死十はれ年より江戸の古里ぬり十六は春又甲斐のゆきくく又江戸



みゆり十八の言又甲あはゆりて又あり一太和はまりぬゆりてさぶめ  
世れなうひひいづゝさざのん雲水舞の福きりりゑもなうて一回  
常一ぬきと余が母は甲斐ふ何ゆる時常ふ様をどうおひつら  
かをゆりて常て居りてうや思ひうつりてさ葉どもあり味増ひら  
覺て事なうておびりやすすとい事な<sup>ゴサリ</sup>桶とい事を<sup>スト</sup>こ  
大ゆりなどいひたんとい事を<sup>ガイン</sup>酒ニタトヨイマシタト云々  
ませといひゆめんなんとい事を<sup>ヨヨニ</sup>サト云々又甲別ニテモ二ヨリテナガイ  
北人のタイシヨト 燵を<sup>マツコ</sup>アテト云々 人のつら<sup>カクシ</sup>けりもとい事を<sup>ラバ</sup>  
程が<sup>ユキ</sup>氣のあちつくと云事を<sup>ガキ</sup>カレルト云々<sup>スシ</sup>ヨリ<sup>ハ</sup>父ノ中ニテ少ニクキ程ノ  
カサ合人よあわれまるとい事を<sup>ヨマカ</sup>ルトルと云々<sup>ハ</sup>父ノ中ニテ少ニクキ程ノ  
こさんまとい事を<sup>ゴイス</sup>と云々<sup>ユラ</sup>ん<sup>ス</sup>とい事を<sup>カクシ</sup>カレルト云々<sup>スシ</sup>ヨリ<sup>ハ</sup>父ノ中ニテ少ニクキ程ノ  
とい事を<sup>火</sup>ヒキヤリクレト<sup>ニ</sup>ウメトモイウ<sup>ハ</sup>ひやま<sup>ミ</sup>味噌汁をわけと  
く<sup>火</sup>ヒキヤリクレト<sup>ニ</sup>ウメトモイウ<sup>ハ</sup>ひやま<sup>ミ</sup>味噌汁をわけと  
火ヒキヤリクレト  
ウメトモイウ

事をヲヤツカナト いづらんとい事を<sup>フナ</sup>イイ人の女房を<sup>ハ</sup>イアヤウ  
人のめ<sup>フ</sup>つ<sup>フ</sup>女れも<sup>フ</sup>さ<sup>フ</sup>ら<sup>フ</sup>た<sup>フ</sup>とい事を<sup>ナ</sup>アト人の子れ<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>平  
おちる<sup>フ</sup>ま<sup>フ</sup>で<sup>フ</sup>は<sup>フ</sup>す<sup>フ</sup>と<sup>フ</sup> ホコト云ナリタトバ子守が其子ヲシカリテイウニアノボコハ  
ウルイ事ヲサルト云ナリ 本餅こい  
ものを<sup>ゴ</sup>ジバ<sup>ナ</sup>ト云<sup>マ</sup> 丈あるものを<sup>ツ</sup>チ<sup>イ</sup>ト云<sup>マ</sup> 奥嫁とい事を<sup>ア</sup>サ<sup>キ</sup>茶<sup>グ</sup>あ  
い事 仔や<sup>ガ</sup>ト<sup>サ</sup>骨<sup>テ</sup>と<sup>ク</sup>事<sup>ヲ</sup>云<sup>マ</sup> サテモカセイニヤト云ナリ  
あき<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>て<sup>マ</sup>とい事を<sup>バ</sup>ウ<sup>ツ</sup>サ<sup>ア</sup>ケ<sup>ル</sup>人の娘の<sup>子</sup>を<sup>ほ</sup>イ<sup>ト</sup>物<sup>ノ</sup>子<sup>ヲ</sup>  
トイウナリ  
ハヤコ  
オホレ  
テノ  
云々  
ガク  
ル  
ハヤコ  
オホレ  
テノ  
いと人のおく事を<sup>ホ</sup>ヘ<sup>ナ</sup>ト<sup>ス</sup>私ハと云事を<sup>ト</sup>ド<sup>モ</sup>チ<sup>メ</sup>人の夫を<sup>ハ</sup>テ<sup>イ</sup>ト<sup>ス</sup>  
ニモツカウト  
見ヘタリ 渡舟人を<sup>ヌ</sup>ナ<sup>リ</sup>、其事ハ<sup>ア</sup>ら<sup>ウ</sup>ぬとい事を<sup>シ</sup>ツ<sup>タ</sup>ラ<sup>シ</sup>ラ<sup>ヨ</sup>曲物を<sup>ケ</sup>ケ<sup>ラ</sup>ト<sup>ス</sup>  
やくとい事を<sup>ハ</sup>ニ<sup>デ</sup>ト<sup>ス</sup>タ<sup>ト</sup>ハ<sup>バ</sup>ヤ<sup>ク</sup>茶<sup>ヲ</sup>持<sup>テ</sup>コ<sup>イ</sup>人の女房を<sup>ハ</sup>ヲ<sup>ナ</sup>カ<sup>イ</sup>ト<sup>ス</sup>  
ト云ハ若キ  
女房ナリ 人のま<sup>ウ</sup>とい事を<sup>ト</sup>イ<sup>ウ</sup>マ<sup>ト</sup>云<sup>タ</sup>ト<sup>ハ</sup>鳥<sup>ノ</sup>飛<sup>サ</sup>リ<sup>タ</sup>ル 人の発相の<sup>つ</sup>き<sup>た</sup>ると  
い事を<sup>ウ</sup>タ<sup>マ</sup>ツ<sup>キ</sup> 飯後<sup>も</sup>い<sup>く</sup>とい事を<sup>ケ</sup>ト<sup>ス</sup>是<sup>ハ</sup>付<sup>テ</sup>用<sup>フ</sup>ソ<sup>ウ</sup>ダ  
ガコトシコト  
コノケラツケテ  
モナユルナリ あい<sup>い</sup>とい事を<sup>ソ</sup>ウ<sup>ド</sup>シ<sup>イ</sup> い<sup>う</sup>きを<sup>ト</sup>イ<sup>サ</sup>ル<sup>マ</sup>と<sup>ス</sup>

紙をセ九すト云ヨシツレ、色クダグ 多シト云小杉トモ云也 相をニル 希大事をユテルウテ 事ぢやといふ事をトモ云ナリ

コト云ヨイコト云ゾハイワルイ コト云ヨイコト云ゾハイワルイ いくふもそのせよといふ此字の代りコト云ヨイコト云ゾハイワルイ

人のホイト云字ヲ入テツカウ也タトハバヤク何所ユクヲイ此事ヲ云ふといふ事をコト云ヨイコト云ゾハイワルイ

ワルイ人ガラト云事ヲウテ人ジヤト云アノ布ハ コト云ヨイコト云ゾハイワルイ のきまひあげくうとくぐくく女も北心

積羽平杯の女の猿のどろ コト云ヨイコト云ゾハイワルイ 一里をくくく 埒中の町に云葉もあまうり

ようりぬ不あまども コト云ヨイコト云ゾハイワルイ ひもきまあちあち不まろ 高良田不此 あめむ

又此の 世不より黄金おの人の中 おいひおしきやうねと又たとも

なり女坂か 世不より黄金おの人の中 坂名司りともす 世不より黄金おの人の中

の見てけちり 世不より黄金おの人の中 ことし程の事 世不より黄金おの人の中 山嶽女市川男といひて此或研を

らまをつき 世不より黄金おの人の中 のより人あり 世不より黄金おの人の中

世の風雅を 世不より黄金おの人の中 みる人いふ 世不より黄金おの人の中 世をす 世不より黄金おの人の中 すと合点のいぬも一通り

めくくぬ事と書とよむ事も 世不より黄金おの人の中 嫌ひ業をきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

こくひ 世不より黄金おの人の中 ぬをきくも嫌ひ 世不より黄金おの人の中 花をきくも

いもなりいよと婆糲多も者を見つらふいよと兼度祐えが一包も遠  
 とりのりのよあていびなもささるるをるんをかたらくきりといつらさ  
 らずいそ緒白装あは膝までつれそよ女れかありこつらさわさ格  
 り女郎のいそりさあささいのぶさあうなるおんさぬの免里の  
 よいさをさぬでこそりつらりのたもさう一照とん痛りちておんを  
 るんかおさる危は巾着のうすますとつらえがたらりまてさつら  
 ぬ事せよい神さぬれれり合ありとそんかおんさぬとそんぬ  
 ようなまがもぬりんて此星はあらなるんぬりのこそとる  
 をそつらて作きけらつてを悪に仲るのりのもきつておつらひ  
 狐のうたあれ女郎が比中も中町の筋神とさびおつら  
 きびく尾張屋の屋田原をくして見つけつらつことあつら  
 就神といつらつら女男といふ神けつらつらぬよりかつら  
 血ふたよ小ぢの肌とてやつらつらを見えいふらつらとつら

思てまじつらつらいびいさつら事とやと聲さつら  
 ちんさつらあぬりいすさつら事つらんつら一は程花着のい  
 つらつらむさい男のあつらつらりやでつらつら男のあつらつら  
 つらつらさつらづの事あつらつらつらつらつらつらつらつら  
 ちんつらつら男つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 ちんつらつら思つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 てつらつら給つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 小判の精よけつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 女郎も思ひいふ者といつらつらつらつらつらつらつらつら  
 をねつらつら女郎のちんさつらつらつらつらつらつらつら  
 袖をはつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 毎日毎夜毎花つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 なんねといふ事さつらつらつらつらつらつらつらつらつら



いもなり一にば女頼多者を見んういひ〜 兼康祐元二包も遠  
 とりのりのあ〜とばなるま〜 翁をんまふ〜 きのい〜い〜色志  
 らず〜を緒白髪は涙までつれ〜女れい〜あり〜い〜あろ格  
 の女郎のい〜れ〜ふ〜さ〜は〜ゆ〜の〜ぶ〜あ〜なるおんさぬの毛墨〜の  
 ういなるまぬ〜で〜そ〜の〜の〜の〜ぬ〜の〜ぬ〜の〜ぬ〜の〜ぬ〜の  
 とんかおま〜危は世同〜う〜の〜ま〜す〜と〜つ〜え〜が〜れ〜ら〜り〜ま〜す〜て〜ご〜も〜あ〜ら  
 ら事〜と世〜ふ〜い神さぬれれ〜い〜合〜あり〜と〜そんかおんさぬ〜と〜れ〜ぬ〜  
 う〜た〜ま〜か〜も〜ぬ〜り〜ん〜と〜此〜星〜い〜お〜ら〜〜た〜の〜ん〜ぬ〜りの〜と〜と〜唇  
 を〜と〜〜して作〜き〜け〜ら〜〜を悪〜く〜仲〜る〜の〜の〜と〜も〜き〜と〜ぬ〜も〜ひ〜  
 根のうねあれ女郎がゆ申も中町の翁神〜と〜さ〜び〜〜お〜と〜ち〜ち〜  
 き〜び〜〜尾張屋〜を〜田原屋〜と〜見〜け〜や〜〜こ〜も〜あ〜〜  
 就神とい〜と〜ら〜れ〜男〜い〜く〜神〜け〜〜と〜の〜ぬ〜り〜か〜い〜と〜い  
 血〜ふ〜よ〜ふ〜び〜の〜血〜と〜〜や〜〜も〜〜を〜見〜る〜い〜ふ〜ら〜ち〜と〜あ〜る〜や〜い〜と

思〜て〜ま〜い〜〜と〜〜り〜び〜い〜ま〜ら〜事〜〜と〜聲〜ま〜ま〜の〜〜と〜も  
 も〜と〜事〜〜あ〜ぬ〜り〜い〜ま〜す〜び〜〜と〜事〜な〜〜ん〜い〜依〜程〜花〜冨〜の〜い〜ん  
 一〜ぬ〜り〜む〜い〜男〜の〜あ〜事〜〜い〜や〜〜ら〜〜い〜男〜の〜あ〜事〜い〜と〜後〜と  
 ち〜〜と〜ま〜ら〜の〜事〜ま〜〜い〜〜と〜い〜さ〜〜ら〜れ〜ぬ〜〜と〜男〜あ〜い〜い  
 う〜付〜れ〜男〜の〜遠〜事〜あ〜〜と〜〜知〜中〜を〜あ〜め〜た〜ら〜ぬ〜と〜も〜や〜と〜も〜人〜ら  
 ふ〜あ〜〜と〜思〜〜の〜〜と〜い〜古〜つ〜い〜ゆ〜〜と〜ま〜も〜隨〜分〜あ〜ち〜よ〜〜た〜あ〜さ〜せ  
 て〜や〜り〜給〜事〜な〜ら〜ら〜ま〜〜唯〜五〜節〜勺〜大〜み〜と〜い〜事〜お〜い〜あ〜〜と〜  
 小判の精よほを〜と〜ま〜ら〜〜と〜や〜〜と〜親〜意〜た〜ら〜も〜あ〜〜と〜い〜と〜す〜さ〜で  
 女郎も思ひ入有と〜い〜ふ〜と〜成〜る〜中〜錦〜より〜起〜是〜山〜法〜師〜の〜屋〜に  
 を〜ぬ〜〜と〜女郎の衣はよ〜あ〜ら〜〜と〜な〜ら〜ん〜ば〜一〜度〜の〜女郎さぬ〜と〜二〜度〜  
 袖をぬ〜と〜あ〜〜と〜い〜わ〜い〜か〜た〜んで〜お〜び〜ん〜と〜い〜ま〜ら〜〜を〜見〜る〜は〜あ〜ま〜  
 毎日毎夜毎それの生あ〜ゆ〜の〜を〜啜〜嘖〜〜と〜〜と〜す〜身〜と〜あ〜ら〜い〜の  
 なん〜れ〜と〜い〜事〜ま〜ら〜と〜〜い〜人〜を〜む〜る〜と〜い〜ゆ〜の〜と〜様〜り〜と〜ら〜ら〜げ



い揚らまりたちがいおまもままふぐまで千羅万象まで面白といふ  
てきのあんどいちがすし武のまきとともやまのふあふ命を捨て  
たふぬといふ事を命とすといふ武の道はあありあり町人いふ事  
りともや利合をせんが父母をや一なるまをよふ合点していふ人  
賈の道はあありありも千斤の秤をふらひ一人ふ敬するの勇之沛は  
ころびてくまづいふをいふ事。あつるは知つる天やを志あり堪忍記  
振りのうきしりの智の芥子の中ふまぬいとも人の如く情き事を  
あらず黄石とが素書といふくちをまふて大抱生ぜず川かぐし  
ハ大魚をいふふたりのあをいふも情織りしてせまうぬ事あつて  
いふ女郎もときあふあといふ男もよふ男もいふといふあつて  
らうくといふ女の道して中一うけなふ諸人あつてをこそ  
事よといふもい海に細流をいともすなふ大ひあつてもあつて  
いふあつてをいともすなふよく大ひある形千有りといふ事

戦國策に見てくれい分る客をも見せてすの目ゆ及奥さぬと  
押有ありあらん事疑おぬい大まこといふ

○おのをもあふよりてうらるといふをまや程殿のまにいせれぬお  
とふれなる世れ人のあふよとてこの字嫁惣右衛門もまといふ  
きりいさといふ事い近所の伊波山の事よあらず袖中おふくといふ  
えやいゆづれのこといふあといふ伊波山の事い下置れ國のいづき  
の事い坤元義も見たり枕草紙は回まともや下置の國よとて  
といふ人は思ひくらぬ心のさかきさき伊波山につけしごとあり  
され最勝院の拾遺の鏡よよりて見れい八雲抄云昔れとよよりて  
やうり近所の國のいづきとむねといふりさう願ひい英農國と  
近所の國よ秀るいづき心のいふをさる見むバ虎を亀をたよの  
店ありて判衣法りてといひて紙袋を入るあきあらん人のいづき  
亀をといふ店のさきあつていふ亀をといふ人名もいふ

店も有やうな乗物の門より見かへありきあまのいひも市川  
島十郎が製法法のいづこりぬのねをりひとほさうふも世ふ  
りてま甲と三井の紋育りりてなをれい人も灸をせぬよう  
成てあて戯場の中華ももささうりなる事いもあらん今  
ヶ津物ゆけ之を勅三郎が子雲あしし監を萩野松本の  
風流すく整良の成を哀榮和作のハッ橋のつちのまを如く八百  
お七がわがたりたりがタアのあししといつともあうせを油を九郎  
もうらりあしつるむいいたる意氣かかろるうと死でことなりて人  
る事寒霜が馬の足よたつと見く男も今うんまが黒文字のよ  
とい洋利よのりてたんと花をやりぬまらう三乗勅を能が生  
のまらて娘のつれとくなり國性那の錦合もあうう深も外  
整川もま床が油を油と那うと指おせうをぬまびいさぬもあど  
久松なるあともいさる人をまあううげりと思ひても二十八

なる男がふり袖まぐりううす十九斗の空ふ向ひと今う  
こころ素を志んりのゆと思そてまわあといまんと陰  
まらん寺も宮も法りの先世をたます二面よふけりぬ法草の  
観音もて見えい寺の終養のといふ不ら老人をんとそあう  
うらぶふ大りのハナをうりより三十まの巻羽織の軍多く  
北里の中うねの場をりいさぬもあう佛のうあも此観  
音ほどをい車観音のあうといさ世も一統ともま芝居お見  
せのたさ一不らふも甲ぬあうありてまづ法力より此法力を教  
らうそは頂の戸のなぶらうりふうといあうまあうて返  
らふ成田の不勤定帳のう市川島十郎まうりゆて百持らうし  
群集袖をうらぬるといふ茶うの事といつもの事よ人あてふ  
三井の紋育り女中まぢり思いやういさぬも油を懸たのち地  
いさるうたさとも地女も豪傑のともがうま余十七の時よ中尾

主膳といふ友とあつたときおつきの事は由緒なき酒をんとありしとき  
 おつきのさむい酒もさういふあつたはふひよりのついでにさういふ酒の色  
 親あんとあつたあばよとさういふ酒もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 女中もあつたさういふ酒もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 何より婿もさういふ酒もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 うちも入つた酒もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 さういふ酒もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 あつた大勢見の中もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 をおつたの介もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 おつたの介もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 人のつらさなりとほをさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 おつたの介もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 おつたの介もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 おつたの介もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの

よの介もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 あつたの介もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 鼓女郎ふよびて酒あり座をなけてさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 いふれどなうと鎌倉屋入神田通住を見せても大名を奥といふれ  
 して置く一地主もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 娘もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 南の竹合もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 の風もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 我儒泗水の夢もさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 天機と見てもさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 人のさういふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 五畿内のもつた各別といふ酒の色とありおつたはふひよりの  
 隅れ大坂のといふ酒の色とありおつたはふひよりの



京なりやさ〜〜〜げご〜〜薩十の人陸奥なんどの人れおご〜の橋〜  
〜〜おぢ〜〜〜の婆もろ〜〜〜のいぢあ〜いぢあ〜  
ぢい顔あまどもあは女郎よ江戸の〜〜〜せと長崎の衣類〜  
て天板とあまび〜〜〜も少神の坐敷なんの〜〜お〜をほろ〜  
りのあまび〜〜も自由の海おなんも化粧よくお〜〜〜あつ女  
那の有〜〜〜と〜〜の風あ〜お中〜〜〜服〜〜〜せぬ  
あ〜〜る女お〜男も男〜〜〜お中〜〜〜人〜〜お〜な  
ま〜〜も〜〜〜〜〜〜お〜〜〜〜〜今〜〜お中〜  
死〜〜程の事〜〜〜と〜〜〜〜〜金中〜  
〜〜〜の〜〜〜人〜あま〜も金中〜金中〜〜〜〜  
〜〜と〜〜の女郎が水〜〜い〜〜と〜〜の〜〜江戸の女郎の〜  
りあり〜〜〜の大根をよく〜〜人〜傳受〜〜〜〜彼人れ教〜  
海〜江戸の女郎の〜〜〜金銀を〜〜思〜〜〜〜上〜

女郎の水〜〜い〜〜の金銀す〜〜〜の事〜〜〜  
たる友〜〜〜い〜〜の事〜〜〜色〜〜〜の金  
銀〜〜〜お〜〜金銀が〜〜〜  
おらんが金銀い色の是代〜〜〜と〜〜又〜〜  
照〜〜地〜〜〜〜天〜〜生民を〜  
氣〜〜〜の〜〜〜を〜〜根  
〜〜〜の〜〜〜  
揚屋の二階〜〜〜  
も〜〜〜満〜〜〜  
是も〜〜南風の〜〜  
侍〜〜〜の娘を〜〜  
〜〜〜の〜〜  
曲〜〜〜何某が〜〜豊盛の〜〜

けり時もおりのひきまをて尼とちうしきりりのなるんといひまおりの  
かその久松もあびりの藤あつとといひを去人のことなり一に當世  
むすめあひる代の十九才斗のあひるの初た力をさうさう事三  
此のこといひるるるも混沌用ケも下まりあ儀をねり山嵐うり  
三條勅を御依野川る菊秋野野に御市川に御助振がぬをねるよ  
心をよきる女よあぶるのねといひあはさり一思こといひも其地  
りして長身唐津の人いらゆれ背の強も唐所あり象背松吉  
をさるるもさるる女部も生色のまうの終話をたをさるる仙居津燈の  
人いらゆれ背の鼻聲の中うの吹りあうさうみあをさるるさすてりる  
よ月あふる耳のぬるるあはるの湯湯が犬を吠るあはるの仙居をさるる  
人をさるるの清水のねりりしてさるるをさるるまうのこころもこれ  
アとさるる生色一人をさるる仙居をさるるそのあはる其の仙居ある  
登

○琴の糸をさるるもいとあまら事ありる拭たうさるるあまらい  
きと琴の糸も初心のうらみ今さるるの初心のあまらい  
事を書き

毎せん一 五 毎せん二 八 毎せん三 一モテ 五ト十ト 二七  
七いらいく三味線のつと  
中ノうらみも合之  
一五十八編子 二ト七ト七 三ト八キ八 介留一  
ろく裏表して覚ぬをばたもあはる合え是も初心ののきあはる八  
流しをかひひとあすのうらみあはるす是はあはるさるるさるる  
竹の物之思あてさく一二通覚まば田くおと心たてし此つら  
りのあはるひてれくあはるの  
○中一箱のうらみり坂田兼武がうらみりおと取あげて見えばすさるる  
あまらの町人續政を兵船とる者あり是は酒を賣りのなるあまら家の  
酒の 上儀もあはるなる名をさるるあはるをさるるさるるさるる  
さるる





○ 幹何遠の春説紀圖あり卷四、みづのせいの塩籠といふ物賣人の  
善くし所のもの此籠の長サ一尺たりあり銀の鹽の仲よ  
置玉の節をそくし塩をくひらき此籠をわめて塩をすそを  
喰ふ之塩をよくくひすのてあらしくありて鱗の中より塩  
をぬす之其白雲のて此籠を取捨て女をねさんとありて酒を  
一飯自吞の湯をおあす事甚妙とてや茶え交といふ唐人あまりの事  
か籠を祓ぐりて死にたりと後これ籠を喰ふつけおきを塩を  
とりて用ひると見えり此説が草綱目にも見えり三才圖會にも  
あり今ハ聖國よりもありとてぬおる人のあまりのお徳のせぬ  
あといふふふうとて

○ 娘れ初を方とみれ介いもりのうと後此とありあれうりも  
新祝のけしとみれ介も男も氣づまり成りのうと其疾のそとす  
三十日斗もいもりのうとておりのうとすといふ余あふ

心うら其やふふありとてなとせ成りのあふ女もあつていやは  
べよよもたうとて毎晩くそのまのしやうなるはけいといふ事  
あといふと後此のかりとてたれいまむのや成りのうとありとて  
せのたもりのたもともとてや男がかりありといふもあといり  
いふぬとてのうとていふぬとての事とていふぬ男は成りもまといふ  
女の歳年もありともあつてのうとて焦弱候が筆来卷三の益善  
總といふ娘のいと金陵の准清橋の人二十とて母をうといひ姉を父をり  
あを姉のすてよとたてよの介とて父の線香といふのをうとてすさ  
まのとをせり數年を父も死つてこれ益善總ひとり女もて名を  
張勝といひ線香をあれたる是もまたありて線香をあれたる  
あどすたふと李英といふりのありいふとて女たるといふ事をあつす此  
張勝がよと来りて火伴のあきんとて探問する事數年之張勝病あり  
といひと小袖をぬく下をとも見せず山便あどすたふといふとて

何遠の春説紀聞巻四あり、みづきのせりの塩籠といふ物、唐人の  
ゆゑのものとて此籠の長サ一尺たりあり、銀の鹽の仲よ  
ぶの節をそとく、塩をくひらきて此籠をわけて、塩をすそと  
へん塩をよくくひす、ゆゑとて、あつちくありて鱗の仲より塩  
をす、其の白き雪のよ、此籠を返籠て女をねさんとかり、その酒を  
自吞む湯をおあす、事甚妙とて、や茶え交といふ唐人あまりの事  
を祓り、きき、就ひ、ゆゑ、後これ籠を塩ふつけ、おき、塩を  
て用ひ、さりと見、こり、此籠が草綱目にも見、こり、三才圖會にも  
今、の葉國よりもあり、さう、ぬ、お、や、人のあまりの、お、ゆ、ぬ  
ゆゑ、あ、ふ、う、さ、り、

れ初を方を、お、れ、介、い、さ、り、の、う、と、就、就、と、い、ふ、れ、こ、り、さ、り、  
枕の、ゆゑ、を、お、れ、介、男、も、氣、づ、まり、成、り、の、う、と、其、病、の、こ、な、り、す、  
お、斗、も、い、さ、り、ゆゑ、の、う、と、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、

ら、其、ゆゑ、ふ、お、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
よ、う、も、な、り、さ、り、毎、晩、さ、り、さ、り、の、ま、の、い、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
い、さ、り、就、就、の、お、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
な、り、ゆゑ、の、お、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
さ、り、ゆゑ、の、お、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
と、い、ふ、娘、い、り、と、金、陵、の、淮、清、橋、の、人、二十、を、母、を、う、あ、い、姉、を、父、を、り、  
と、姉、い、す、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
と、さ、り、さ、り、數、年、を、父、も、死、り、これ、益、善、總、ひ、と、り、女、を、と、名、を、  
勝、と、い、い、娘、を、お、れ、介、い、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
と、い、ふ、人、の、事、莫、と、い、ふ、り、の、あ、り、い、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
勝、が、お、り、来、り、て、火、伴、の、あ、き、ん、と、て、探、問、す、事、數、年、之、張、脂、病、あり、  
い、さ、り、小、袖、を、ぬ、く、お、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、

秘よりうらうら弘治の辛夷此正月李英とつむぎち嫁入せし婦の  
くく母なきの姉の審をたていさくつむぎ一人の妹ありうらうら  
とありてすいさうと今もまゝある事あらんといふに付張勝が  
曰我こそ御ら若總と人のまらうめあらん事を託さうと名をまわ  
らめたるをうて男の次女とありたるをいふに付姉と弟を思ひて  
曰男女祥死して我をあげむきまづいさく事をもつてあんぢも  
そ年時ありといふとも誰う是を實とせんといひて拒く對面せず  
若總いさくうらうらの拒きて曰妹り此方りやいさくも男のまらうまを  
かすらば此亦よ命をすそやうらうら白たのいさくせんといふに近きは  
とりは徳治女のありしをよびよきいさくも強う果して處女ありと  
いひて姉もこれ石のどたの真心をうらうらをあらうらとて流して  
うらうら男子の小袖をとりて女の小袖をうらうらに於て李英とて同く旅  
よめんとするは張勝といふ女をうらうらとて女とあはれしをうらうらを見て大に驚馬を

きりうらうらやさして又李英ゆりて其事をうらうらもまら李英が母よ是を  
感じて李英がいまも妻をうらうらよまらせしめをいさくも李英が妻ふも  
らひいさくよをうらの姉とていひつらうらうらも若總がいさく李英よ  
嫁いさく人のまらうらをまらぬらうらうらといひていさくも若の人も  
大勢うらうら取持ちんども中へ李英とていさくもまらうらうらといさくも  
ありまらうらうらうられ事たうらうらを見まらうら若治女ありと見せても  
いさくもなうらうらも古きとあうらうらうらうら事ありうらうら若治余治  
日もまらうら合まら事の見えうらうらありあはれ娘は春日野の麻とあはれ娘は  
寫まの麻ありといひて若治もうらうらをうらうらといさくも若人のいひて  
男もあひて女の尻形もあはれひぬと女神とてあはれ神代巻をうらうらを見まら  
あはれうらうらやれとあはれひぬと女神とてあはれ神代巻をうらうらを見まら  
色はずつと昔をゆらうらあはれうらうらといさくも若のうらうら若治とあはれ  
する人あはれもいさくもいさくも若のうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら



くちまのりもあつて陸奥れりの細布のりまをこつちあひびびたタ  
きりをまつらひもあらずむさぶよのちまきや口のみたき栴さしでよく  
ーのおもてゆぐごばんこころほはさきさきしつれ伊藏のうへ目におち  
こつちあひまのききつびきおのひの妻たまふぬ

○夕敷たぐさふ此春より合せせ百顔とりやして見えハおりのき  
ゆもわきまをふす蛇くら敷いしりわきこしりゆ人の井稀も法  
ぬけ疎と付一ゆを十五馬の候一丈や俗橋より二丈入伝事と  
いつちよちれを神の髪さたてあつといゆゆも十馬つらこり又寺庵  
の奉加の三達うあまといゆゆは卯の花ふ心家の田のうへまづしつと付  
て十五馬の候一又きぬよ小原の雪れつらいけとりゆは好免屋  
いも入ま傳と付てあましすて思ひあるも飯匂もあま甚る  
のつけまといし事出しりりぞく一治徳がゆりまおりのりて古  
く候ししと報しとあどの向もていさぬ連歌をあらんより

まいゆみのさかり候一如牛ともりか物語一治例も冊事をかき  
て装ひたるふ連歌もて用り書けりといふも用りといふも一将一  
河東院といふも春よきふたをあらししに次女あまもふきつしつと  
いふも一とふまことまなりもちひてうけとりてごらんども鬚氷をいとい  
くゝあましつらちりつらごの澄に仙鶴なまが馬をうんまは百馬の三百馬  
のこしつこころ事なまら馬をすしつこた敷より事記り長たより  
りて一置げし事なるぬりのさむいふ馬をうけちりぬるの見らる  
むさしといふもかきごまといふ馬りもせし情愛もまるといふまが  
勿痛もまを口をたすて居るなまはまきを人ぬきやうまをるまら  
なまもいひあつてもまといふも和歌のしらすまて幼昔戀西のりの  
あつたよまそ馬をとりて馬つらりのの情愛もまをせよと馬す  
まのあやまりたるもいひもあがりあらま其巻づくもふらん  
驚ももたつらあまがふらりてこし事記りあま事

○骨子いさいの事と毬子ともつと昔昔扱ふを見まはらふの唐合すす  
 あるの事又うらうの牌子とりひく日かとおありちがいなまゝの事ある  
 古きものもあれこころもさうな事つがふも口つちあを四つありの事を  
 ひよりの事「ひまや」「川あ」などの名あり三つあいたひひとあぶ  
 かざひひと葉あをとりてまの事「筒目なる目あ」とありて此の事  
 こころの事と数学よりいひて中へユズ一かゝる事と此の事といひ  
 こころの事と面白くはまといひ牌子の三枚とすこころの事とすこころの事  
 ひりハッあを「カイテウ」といひ九ツ者を「カブ」とする事と「カブ」の事  
 いざおとしりすよつかりて目れたる事を「ブタ」と名付といひ「カブ」も  
 いあゝの名ありてああり筒とるんれ三枚とるひをあらやとるやいふ事  
 むづうしき事ともありといひ合せわさといひのあり或者さといひ  
 ものあや「か」といひの事ありひの常らうとるかといひの事  
 いあゝの名と事といひ「之標」蒲経をいふ事とんまハ諸國の標南を

本

のせつれども此をあらはれ通すよとる古煙賣らあよみせれども日か  
 めて用とるちがひあるといひ「之音田」  
 を「うん

を

甲斐

日か

○便用一覽もも賽の國あり中へむつと事ともとるていり「名  
 あり番れ金の付りちふた十の程とて用たなり通治「雅」  
 なるあをせよとてなんことといひの事ありと見たり物賣といひ付ハ  
 事と日かよそハ賽たぐる事とるいふと事とて居るハ文盲なすや  
 む「西施」といふ事とるいふと事とて居るハ文盲なすや  
 いまきぬと弾利町中の若者ともいふ事とるいふと事とて居るハ文盲なすや  
 ぐり鳩乃杖とすぐりてま馬の刺友りり久が山後想ふたちむひ「老僧の  
 ときハ向うけ「漢義多りす」馬居とハ腰をぬく「此娘が唱









ありきども世に申はつるもまあるいしはせいのあきとふ  
香のわしと此女房をよびてあてがもをさふさしたも此のうらな女房を見を  
てすとうく此女房をこりりすうて源氏をい取らぬの心申なり  
花ありし月村雲常解の何某といきなりせいある命を推ふうて  
いひたすけの振いいしをて今をさすあて者なる前もいひてどく  
もといやりの人の女といふなりて是れ凡さたうつありのうま  
父節さぬとうらぬとも嬉しうてあいらうさたるのたまは古柳志  
トウトウといひのあせうしは鼻毛をあさずおひなすひう始と  
三冊ものうらひ道をもすうといひたぬいすづかまづつらざるの心  
底まらうらうらぬと志もいひてあつ事と心中して死ぶたぬ人  
のうれと浮利も有ていひて死ぬるといひぬあの人さぬたうら命もほ  
照いあれ女あは此世あひてあつと下すは思ひ入る不が信は  
字もいひてうまも得しは人の人れ人を有てあつ世信といひの

親ふつくるは忠をあらうら友きあらは交り兄弟の道屬家のよ  
までも此一字がまのまていなるの信よきぬいひのまびき車  
是此信といひ字もいひて勢ずいひうらうら平生まはむがたなり  
あのはらうらいひうらその信といひ字もいひてまきいれもまよ  
りて母をのらむ申といひのまていたいもなありては女房を  
あてがうらてともいひて源氏は思ひぬあつらうらも母のいひ  
るよそ女房をいひまさと其女房は向ひて今度せひたうら  
連は母の心をむりすうて下通のよびあつたもねの源氏といひ  
女房と二世三世主婦のけいひてをいひてぬまがそ照るも疾を  
いひといひのねもせうらうら女房の事をいひ見をいひ  
かがきぬ福よはけをうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
きせむらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
すはうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

交

して中世の世も此人もうつくしくあつてはるるも源氏も一生のきりきり  
とどめてをむ事成はつらうや信の字なりちて生もてんども文盲あつて  
懐弱くは堪忍する事あらず當り女房とひつる福てらくせひる死  
のよむももうす麻又く大事のふきをなめる流播二人をてふとい  
りのせうくうりたりといふ酒を腰のぬけつてははほど色あはる  
よは悩と申すくをを列のゆいごをわをもそあをわたりをてあつた  
をまの後ふも赤のありやうふたのまうといふ事氣の付べき事を未練  
あるむより信の道をとり失ふ事をせうかうや成事かともちかはず有  
らかりのちもまづ女も男も能合点して信の一字をあらうす信の一字を  
とまをいふ友もたら事あつてまはめとなりてもきりのうす  
交うす極まば一旦はまを女房よりちてもおれ有服よりうつくしく娘があ  
まをまふ心うりて前の意も心もうせそを女房をまもつていふの  
勿論たといの取つていふまはうたづひもせぬべき物もあつて余か  
余が文壇い  
りのこりより

此後公美  
の通家  
あり候  
此後此書の  
のよむも  
もうす  
麻又く  
大事の  
ふきを  
なめる  
流播  
二人を  
てふと  
いふの  
せうく  
うりた  
りとい  
ふ酒を  
腰のぬ  
けつて  
ははほ  
ど色あ  
はる  
よは悩  
と申す  
くをを  
列のゆ  
いごを  
わをも  
そあを  
わたり  
をてあ  
つたを  
まの後  
ふも赤  
のあり  
やうふ  
たのま  
うとい  
ふ事氣  
の付べ  
き事を  
未練  
あるむ  
より信  
の道を  
とり失  
ふ事を  
せうか  
うや成  
事かとも  
ちかはず  
有らかり  
のちも  
まづ女  
も男も  
能合点  
して信  
の一字  
をあら  
うす信  
の一字  
をとま  
をいふ  
友もた  
ら事あ  
つてま  
はめな  
りても  
きりの  
うす  
交うす  
極まば  
一旦は  
まを女  
房より  
ちても  
おれ有  
服より  
うつく  
しく娘  
があま  
をまふ  
心うり  
て前の  
意も心  
もうせ  
そを女  
房をま  
もつて  
いふの  
勿論た  
といの  
取つて  
いふま  
はうた  
づひも  
せぬべ  
き物も  
あつて  
余か  
余が文  
壇い  
りのこ  
りより

大き〜ひむ有妻有り〜女房より〜女腰えよを付る事  
〜妻あり〜天中を〜いせす〜置を  
〜取〜せらひ〜た〜何をや〜女腰え〜女房  
の目を〜教〜下卑〜心底〜若〜腰え〜入  
〜随〜妻〜論者〜とり〜けぬま〜さ  
〜人〜事〜ある事〜成  
〜事〜か〜事〜有〜か〜事〜文盲  
〜此〜通〜若武者親父の〜恥〜代  
の目を〜身を〜成〜あ〜志い〜此  
〜編〜引〜二杖の〜め  
三浦山〜の〜ハ〜何をや〜女腰え  
〜め〜魚〜さ〜女房〜わ〜  
〜書〜

中一後家づらひ。腰えづらひ。比兵尼すき。床すた

さき本まきの花も枝をうらひあまはゆ。さあき娘あはは。昨帳紅圍  
こいもくさといふゆる。この箱入娘も思ひつけぬまづ。おれ。まき。その  
ふの。おれ。次中よす。き。の。後家づらひ。あ。と。き。事。し。ゆ。し。く。ゆ。事。も  
信の一字を取まづ。と。い。あ。る。ぬ。ま。づ。あり。源氏も敦賀屋も岡。事。の  
やう。と。祥。よ。う。け。て。見。て。時。の。源氏。が。な。さ。け。の。ゆ。し。とい。人。も。あ。ま。と。も  
あ。ま。め。き。事。の。も。と。あ。ら。ん。お。こ。る。あ。ひ。とい。事。の。ま。ま。敦賀屋の。文。首  
でも。奥。た。ま。と。女。房。は。目。は。ら。ま。し。と。の。三。つ。さ。人。能。吹。く。あ。ら。は。は。り  
せて。源氏。と。白。髪。も。でも。た。の。む。び。さ。と。と。い。強。き。あ。ら。事。の。想。で。若。氣  
と。い。い。ひ。か。さ。も。敦賀屋。た。う。と。が。身。代。り。て。五。百。貫。目。を。い。こ。し。と。い。ゆ。い。く  
とも。う。と。源。下。一。系。良。た。ま。の。町。人。の。一。年。よ。と。ま。を。極。つ。い。と。の。者。も  
又。一。ず。年。ふ。つ。い。あ。ら。し。も。と。ま。を。い。有。下。と。塵。部。の。星。撰。と。い。つ。と  
りの。こ。う。う。り。ら。ち。之。挽。久。た。う。と。も。と。ま。を。が。す。た。ま。と。あ。れ。や。ま。と。ち。り。と。を

見まはれ人の大まがよひあまともよく根をわけて見れば松のうらま  
おちしうら松の根引しうら樂しうらたおたうら。一。夜。よ。ま。し。と。い。勤。氣。を  
うけしうら文首ありとしりか論を根をまして極。事。中。の。不。と。い。い。し  
も。お。う。ま。す。金。根。ま。し。の。大。臣。た。ま。も。と。も。た。の。大。臣。と。い。ま。れ。一。女。帝  
を。引。取。人。と。十。の。月。よ。と。三。つ。は。の。の。と。あ。ま。と。ま。の。勤。當。の。の。の。の。ぼ。り。て。丹  
波。と。ま。る。物。を。女。帝。の。ふ。ら。う。ら。う。と。い。つ。丹。波。と。一。勤。當。の。あ。ま。と  
ま。る。二。月。若。あ。ら。り。が。身。の。あ。ら。し。と。い。あ。り。し。う。ら。と。源。下。と。い。む。し。う。ら。の。ぼ。り  
と。丹。波。と。い。ま。る。の。の。な。ん。だ。も。三。個。一。個。と。い。つ。他。極。を。せ。ぬ。の。傾。城。の  
お。り。し。う。ら。ま。あ。ら。ず。と。あ。ぶ。ら。人。と。大。ま。三。個。一。個。の。他。極。と。あ。ら。し。と。い。た。事  
を。極。ゆ。し。と。い。う。を。ら。り。と。見。ま。は。れ。の。の。も。た。う。た。事。之。極。事。の。ま。ま。の  
げ。と。や。む。世。活。の。ど。と。さ。り。と。い。ゆ。し。と。他。極。を。せ。ぬ。の。の。白。二。の。面。つ。う  
人。の。或。る。あ。つ。と。一。ひ。か。か。れ。ど。と。一。車。と。ま。算。盤。づ。れ。大。ま。と。い。い。と。て  
た。び。の。面。白。う。ら。ぬ。と。ま。と。い。し。う。は。里。ま。と。一。夜。よ。つ。い。ひ。さ。ら。ら。此。の。ま。ま

と申すやうに古く女房のりつを庭をりつてあつと軍法の本女御緒葛  
孔明がけりていふもむたがら能く味つたよほき女を人々はたふす事  
は備す事と云ふ合点す此に此に此に此に此に此に此に此に此に此に  
不如退而結網といふこといふこと魚を釣ふ大づ集りて一網のをて  
ある魚の真をとおびき事と云ふ一網をてまらぬ物をとおびき事と  
是次まんよりの魚は咄を思ふ見もせず宿ぬりて網をあらうと  
持てゆきまらぬ魚の六つうううと云ふ事と云ふ者もいふ事と云ふ  
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
二之幸あひくそ女御のむとを思ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
よといふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
あつたわらんばあひく女御を一旦根をりてさか抜けばあまりふる入の  
物といふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

結成す辰よむと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
一之両を神軍の一と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
万路の志を實と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
一の二路の伏兵と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
そのもの余おりの風程より大をさる事あるは千里の行も一星は向  
ふつと始まる女御のいふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
思ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
が秘事ともいふ二説はも理あり老若ともいふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
此は授の百の貫の心吹も同し事といふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

○すまの物づくは甲斐の志と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
つりらるる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
けれぬ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
はあつた事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

久がよいちうほいさうり積あらんまや雪ふりさやの中山なごうよりそ  
神を月となまほ白根のまくなりてありて富士となまほびく白く余座  
あよりんん西のうまよびくまきく秀ず東のうま富士平雲よ接くと  
風特きまひあうりさ

○甲斐の國は富子ありていふにあり此村の山は米んご山といふありき此  
なんご昔より傳へ弘法大師此布を巻きて敷くをより一人の姥だんぢを  
あいらくいりると弘法此富子を布をあらうりあへず弘法怒り平を  
信び加持をうみ此米んごことごとく石れごとく成り姥是を後の山は  
舞スりよよりて今よありてぬ此といふ余世りのを見らる大十羅卵のま  
人のまよてまらむとも申くかくれまよるあらず白甘雪はどくま  
まよくとくそ割てんまば申まよぐ赤く米のまよ一ひまよぐも是  
いとぬりりり相えを命を日本よまわやう成りのまよ弘法の不為と  
いひ傳へあひまよ此のまよごめを神代よりうれまよぐなうらん胎まよ

弘法は破命すなうりのなうぐ余の古よりのはのまよて葉ももたるまよ  
此のを粉すて藤蔭は消まびいゆるとしと余が玉まよて氷干て後の奥を  
用ひり妙なる色あり此のふ膠は命ごとく或は余が書一書あまのあひ  
らの名もなまよの色もれうまよも此後の奥を同じまよ一氣を付く  
まよ

○信濃よりくる赤葉石ありりつのは割ても赤葉のありりつと見ゆあり  
日本よても赤あまよ赤なまよありと見ゆありと是を石徳ち子の蹄の  
此れ赤の蹄あまよ是も消命の後ありりありまよも石のまよ  
まよりて人れりの物なまよありとんまよ石あり是の物あまよ  
あまありて奇妙なり人地よりなせらるあまよ俗説赤の幅赤まよ  
とまあめてうまよのまよひまよあまよりこまよあまよ  
眼むのまよも引らまよ

○血の池といふものあり甲斐にも東倉の西にうま血池あり是

辰砂井なるべし 辰砂井の鏡本並に土人のたぐひは目をあらしめしむる者よ香をよしのたぐひよりて見まがさもあらんや 古石古石の端ふりたぐひとて沈黙の通るりて世の中の人たるをいふれ地をいふ信をおこすもいお 辰砂井の鏡本並に土人のたぐひは目をあらしめしむる者よ香をよしのたぐひよりて見まがさもあらんや 古石古石の端ふりたぐひとて沈黙の通るりて世の中の人たるをいふれ地をいふ信をおこすもいお

○中此國の海は石塔あり是は古國志の船政ありてありて一かこけありて 辰砂井の鏡本並に土人のたぐひは目をあらしめしむる者よ香をよしのたぐひよりて見まがさもあらんや 古石古石の端ふりたぐひとて沈黙の通るりて世の中の人たるをいふれ地をいふ信をおこすもいお

○張華の博物志は田前は巴豆を飼て養ひぬむる三年よりして土皇の 辰砂井の鏡本並に土人のたぐひは目をあらしめしむる者よ香をよしのたぐひよりて見まがさもあらんや 古石古石の端ふりたぐひとて沈黙の通るりて世の中の人たるをいふれ地をいふ信をおこすもいお

りのを首嵐といふなり又嵐は蛇の懼る物の物と云ふは嵐を以て是を名ををてて懸る余がゆ見し嵐の説を書きし物物端よりいふ嵐はよく遊魚を好むものこそは族類多しものちいさくして害も又少な 辰砂井の鏡本並に土人のたぐひは目をあらしめしむる者よ香をよしのたぐひよりて見まがさもあらんや 古石古石の端ふりたぐひとて沈黙の通るりて世の中の人たるをいふれ地をいふ信をおこすもいお







書ておくりありは平のいうやうに洗ひてもおつる事なり。一そ女嫁を  
をたしぬまのあつるをききしよりして思を中しとて女は貞節あり貞節  
を見らるる事共あり又俗説守宮れまらるるを引きおつて竹の筒  
に卵をありてあきら入置の中よりをうひぬると又あむおとせを  
引きおつて山を隔ててさぬん煙り山を隔てもあるとやいひこの事  
くたまりしを杖男と女とツとせし我持ていつ時か必ず後よそ女と男  
が夫婦ふれともいりなまは守宮の説なりとありは花經志祥太郎の條  
守宮の血を取く女の臂にぬる付あり若其女が石心中ある事有付り  
後どもおちすと見えたり物志の説とうとうその事ありしをば款も  
「おちすとたぶとせし中の色れかせあひいふ人よあつん」といふ事あり是は  
法華經の流れ心を用ひたり又「あせぬともいふぬりてんりある」の  
いりりも守るうたりしとあせぬ款は物志の心を用ひたり  
○ゆるするはくさいいふも長くして廣きかやうに毛禮を一枚おてりし

飛砂りともいふ但し此のくちを切て用ひは 此のくちを切て用ひはむつればあつてぬらうふのこを窓をわけたるを  
よーればあつてう條うこつて一氣がうとむくもぬるやうにうらとせし  
人れすまぐも有らんぬる

○墨を油煙より松煙よりとくあつてはうらとせしむつて南極抄にも  
五十年以前の古列そが三十年以来の墨は唐紙にあらぬと  
論じたる事 油煙よりも中華よりくは古墨とあつてはうらとせし  
うらともいふ人ありと文字にうらとせしは水を含れしとせしは松煙は  
よくとも墨ふ入くはう煙置てて中の中の水よりとせし  
松花堂の煙は墨の牧溪の墨を傳くう牧溪の墨の色あひるなりし  
不あり

○夜生想右忠が和譜の同はるがめと程るなりしと葉をひありと  
田舎よりとせしはうらとせしはうらとせしはうらとせしは  
○大瀬を二十五此時より也家よりいふぬともう華音を通したる

まきとたのり

○ 園島様之の長壽のしつは長左馬といひし者之善音の奇ありしを

眼え香向がしつは和申の華宮といひしもむと學のありたり

○ 椽の本は曾なまの日本たびきとありあり自草大和の人椽をあら

て柏といふあり大和と例柏をこれごとと云なうたてこれごと

といふ例柏をいふ椽れ事がいふぬめを大和草もたて例柏の

をこれごとといふの引おけり鶴梅標といふ椽れと椽れ標とぬ

が櫛のわのゆ也

杜若れりるごとと覺と燕子花のかのす成をあらぬが杜若れ

らるのむふあらす

○ 甲斐の楊梅の椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

甲斐の楊梅の椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

○ 甲斐の楊梅の椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

松は尾松をいひし尾松はよふきのを椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

氷仙をいひし氷仙はよふきのを椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

氷仙はよふきのを椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

風尾蕉は椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

風尾蕉は椽れは椽れは食をら事にいむ中華にも血を

○ 海棠を東國より西國より大和にもあり多し葡萄ハ日本の

内もその甲州よりとすあり長サ五人五守梅のふさあり實も甚大

此は古大漢の張騫といひ人文宛國は使らるるが國より椽れを

求てぬらるといひ是も異國にもよる葡萄ハハと見えり西陽雜

俎に見くると名馬乳又水品ともいふ天竺の是を酒をつくる富人

は酒千斛ふある十部とありすといひ親の文帝は群臣のい

は葡萄を酒に酔をぬる若餅ても確やとも見ゆり也ハ蒲桃とも

書あり物類相感志よのせし此のよう香うんと思ひ唐麝香のほの  
らちよ二匹入下し實ありことごとくきりとも見たり武徳志の表考の  
内にも鎮南の事をのせり又本草奔命の震重がいつく東南の今らひ  
て病を患へ西の人の鼻を喰ぬきともつが如しといふ是を文盲之波斯より出  
しものゆへ煙ふ所のきく言わ下し関東れらあても武徳甲別の人七八月  
ありて是を飲び食所の中これやうよまれどもいまぶそ毒者といふ事を世に牛  
房の毒草の如く入れども人々鼻を蒸らしてあつる事如く茄子も人々  
くひぬきとも冷のさきりうらうといふ事をあつるす極めたがひ誤り多し甲斐  
もて余が家よ黄檗おひの悦峯禪師を招待しうらうの葉よよ葡萄をわして極  
多き是を強何らうらうの禪師のいまらう中華にて悦峯の親あども此葡萄  
を極くきくても日本の如く成葡萄あわす勿論あつるやうあつるあつても  
甲斐のどく成ぬきうらう中華もも多うあつるといふ事いれ之大和が草  
もい事をあつるうらうのせぬと三々國會ものせし事流や一産麻など

いそも士危れ家極極あつる人あきとも味うらうらうのり甲斐少の極品と  
いふよりあつるは梨柿葡萄あつる極を二三十種あつるうらうらうのり  
極を百極といひて所持しうらうのり或は此架のりも名種を美酒極とく  
侍を旅し歌をうらういひあつるは是をうらういひ今をうらうらう女中極の  
是を鬼灯といひて吹く音かきもはうらうきふ古人も世極のりして宴しうらう事よ葡萄  
葡萄のりうらう酒を飲む事なうらも極ともは南朝新書六帖友を仲賦北奇  
書津逮書侍あつるのせ文よのまらたがひ多し續漢書は松風の子羅とい  
葡萄酒をもつて一斗を張縷の贈りて涪州の刺史とありし左事も見  
うらう今南唐よりも千シタといふ酒もも是も葡萄の汁を造りうらう酒  
一種菓<sup>イヌゲ</sup>園<sup>ドク</sup>といふあわり<sup>エヒスイ</sup>ト<sup>モノ</sup>ナリ<sup>ナリ</sup>是もも酒を造つる  
大和人推をおろして磨むあつるいつき面白し余が向よるをあつる極の聲  
あり推の聲あつる思ひ付極  
○ 沾徳が向よる兩國橋あつるうらう遠船を見んくあつる身しけは其新書を益帝を



婿一うると後三よのど一女帝もよしく此をくらとあつていふを  
ゆつて猿神よつとてきつとこの女帝と地皇をいふ人もあまを結句猿一  
あひといふのあそゆりし一古秘は此女帝のむれうち入細きりのと金の  
ふんもようぬといふ人あまをいづも一福引れ縄をもちびとく大根  
ゆんどの男もあつていふ事やあまぬりの本といふもとちえ不立文  
字教介不傳といふて文字ハ乾屎極シヤカのとも皆やとてきぬ文字はらふ  
あたしを禅家の坐棄の法なりあどいふもよく念長してんまばりむ事  
あり麻三行といふとく文字を可極一而大極ありと知る一括り月よ意  
強ありといふ事孔子の可く置れ大事の終なり

○さう願を人のいふ事よく有るは底ふ石れ花生あり此石を白く馬赤  
黄の色をこれ存のひとつようあつてさう相の中穴をあけて花をよまると  
お之能くつらう。是れ人本草よのせつとて此れ禹餘糧取らんといひは建  
いまむ怪事をもあつていふがむれあつていふさういふはさかじつり

木のあつてとていふこれあつてとていふは此石は伊約ひよりもあつてとてさる  
石とありては中は益たる水ありとておびとていふも有る又ハ麵コトシのやうなる  
おのあつてもあつて穴をあつていふ名をいふ難いともさういふとてさういふ  
も明く禹餘糧といふ名ありとておひして大和本草に取らる見ても生駒の  
よりあつていふ事をのせずぬと奥原篤信もこれいふとてあつていふのと  
いひ。いふも室山寺の明堂比ふあつてといふ名は明堂のいふとていふ禹餘糧と  
や中らんといふや中らんをさるあつていふは極むるよりあつて大和のうち十も或る  
二十斗もあつていふあつていふは禹餘糧といひはさるやさす基四と  
のうちよりて明堂のあつていふとていふとていふとていふとていふとていふとて禹  
餘糧といふ名極く此禹餘糧といふ名のをりあつていふともあつていふとていふと  
秘蔵をさるりののてとて除糧といふも三ぶあり禹餘糧といふと大禹餘糧とて  
和名山のうら名といふ其いふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて  
具といふは夏禹の師あり世道を吞て仙すたよ太一此名あり此石會稽山

あまとも鬼神まのりて人此本草ありてす或をこれ里人糞と云ふ事あり  
ありて西事一ツれ石の脈をつきく一ツつ引くよまるといふ事ありてんが取  
事ありてすともや林名譜に書く新園心温洲の石あり石のうらも昔あ  
るも又白きもつらむる粉あり名付ておれを禹除糧と云或を紫或は馬  
或は黄ある或は白き種これ石ありてかすまり粉ありて福と合せりかどく成此  
同よこれ粉ありてつらむる登真源候といふ書一太禹除糧をいふりゆ  
曰孫丸の法あり其あをよいり禹除糧六腑をさるゆ五臓をさるゆと  
いり謝を抗五雜俎といひて恭心よ大に除糧あり是を見ん石之石の  
甲あり甲のうらも白あり白れもち益あり相傳禹の師大一是を吞  
てあまのすす此也よ此名ありて又つらむるすす水有少りりのカシマ  
のそく候りのあり石中よ益子といふ會傳言よ石をそ粉を出す是も  
同く物とあつせり抱和子も同繪本草博物志あれ中の石と云列録  
其介が草集解ありてよあ見へり見るべし女人の岩偏帯

ト子りの事ありてつらむる用田と張文仲が備急方ふんてり産後の  
煎薬を居一疾病を治一傷寒の後病となるを治そ介切あけて居  
がて一石と偏録に書く禹除糧と半夏とあつりて粉の卵とことと  
瘰癧デキキうつん十年とつらむるつらむる生約の神伝のまむといふ心あれがわ  
らる粉つらむるのも心つらむるを醫者たるとわがむるわがむる郡心の醫傳杯  
は厚くとあつぬといふ人多しつらむるつらむるつらむる

○花も草もけしひみよりてたのけしひありめつらむるつらむるつらむる  
えのあり花のつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむる  
あつておほひいふたれど海棠のいまぶ算る花のつらむるつらむるつらむる  
一牡丹をさるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむる  
まもつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむる  
あり鬼百合採すがつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむる  
ももつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむるつらむる



もさう之等牛の尾のうちをいさうしだぶたなるまふ見入て  
おりの尾一横も初とちうさうさうさうさうさうさうさうさう  
の尾といふ横の志うして花大く見田をい白横の尾は似るゆよ  
てこの尾と名付るゆゆとおひしたるよは極伊約の山よちうありて  
存りさうおろし此人もろを本は円たる男よいづこおろし  
といひさばりこの尾心と名ふや者く其人ゆりたが日らうまてま  
てて極尾心といひづいづいありてゆさあふまといひぬれ人のい  
く生約ふよりも二町さうり奥ありふき心の此極の本ありて白  
世よのづうづゆる種ありしうしんてま極いしめてあま其心の  
よりて極れ尾といひしをさうさうさうさうさうの尾の極の此  
ゆさうさう伊約の白子といひあふふ極あり世よふ極とよびて  
まゆす事今見れい極極よりて初百番のうちまみし此白  
よて能知とをさう事あり是もあありありありありありあり

もいづありて三十種の歌仙とみぢうさわり楓と書あやまると  
楓さうさうあけすもみぢありありありありありありありあり  
おのさうこれすこのまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
よりの頭よりま合たるといひて一まんて完うせまサあさ  
よさうさうりたるそんもおりのまてまてまてまてまてまてまて  
日あひを那あやの幕おまうしめてまてまてまてまてまてまて  
らうさうさうさうさうの俗うまてまてまてまてまてまてまて  
日ほのて笑たてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
申なれはまもゆあさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
あも心わりてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
てまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまて  
らうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
らうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ありたびさしありあんにいふすもあつたあつたの  
花もたまけぬ教子花を志のころしつゆくとらふありて  
ども見くつらんてもいふしつもの其介数つしつあ  
うしつらりしつ

○  
雲の亭庭桂のすしつさもど中華とてく半挺さありつしつ  
雲の亭の古たしつ中しつらつもあつびつしつ中國の雲も傲金子の  
といすしつさもどしつあつらつりつつ吳天常の世雲すしつ程君貞  
十二銘賞もすしつ是もせらつらつあつしつ江戸もてを新しつりのあり  
余が十五方の付りつあつりつ文寶雅譜といつりのをさつこの見せつと  
よせつらつ夏の願あつらつ是つよの長業もてつ雲語をせ又  
よしつ神の書つらつとて雲れ事あつらつしつ書のせつ  
雲を用る事つらつつをつしつ雲れつあつあつ中も用ひ松  
もつらつ雲もあつしつ水入つ一板をさつらつ氷を道てつらつとつ

あつしつすしつれ色をそんごつ水を物つらつつ用ひつ用ひつ  
もつらつとあつしつつ静もつらつつあつしつとつ  
かうもつらつらつらつ水もつらつ大つつ媚漢の上岳のつらつらつ  
甲一面もつらつをらつたもつらつ茶の氣もつらつ用ひつ相別君つらつ  
絵つしつりのつらつらつらつあつらつつらつ用ひつ  
硯もあつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
道つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
秘蔵すつらつ紙筆すつらつ水とつらつつ採つらつ物つらつらつらつ  
もつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
硯も耳つらつをつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
池つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
むつらつらつらつ水も毒あり

○  
女も男のつらつをつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ

男女れをあらひく書づ〜わく〜う〜〜かんちや〜  
○ 繪ハ唐唐を學ぶべ〜い〜い〜日本よても名画と言稱の後人にも〜  
中國を學び〜るりの本於画史を見〜今古法眼元信も何を受び〜  
馬遠夏陸牧溪た〜を學び〜〜其介巨擘金剛小野管明兆  
典あるを〜のうを收る名画と〜人まで中國よりゆき〜あり  
いの松もやちありを養朴探幽あ〜の年そちち畫姿を好〜  
作あり〜書ゆ〜色ども畫畫をま〜之彩色のあり〜らちも好〜  
畫にもあり其の〜をあら〜の事といひあ〜法ま〜  
りり長養の畫師世の春月画學ありて画也た〜と救生  
惣右衛門いと〜もい〜り今系於世継柳只俗名といりの画也  
を〜〜世は用いらる名あり〜大坂を檣有税家名といり  
といりの画は〜英ある不多〜吉田秀雪といりの後い〜  
〜彩色の妙者ども今い〜〜田さ〜人〜此秀雪の

文盲成より〜や〜得り有〜彩色はよ〜そあり物堅如氷よわ  
物語〜後をあら〜のふわ〜るの氣が後より〜い〜思よ〜  
あり〜〜洞林を後い〜初かある不多〜又中右衛門といりの後を  
とい〜い〜見す想〜世は井の内貯る蛙多〜梁唐宋元明まの  
名ある画を〜見る事好き〜後のか〜〜余良此源は節が  
此後とい〜日本二幅とも好〜とい〜の多〜徐熙の繪  
此後も七幅まで見〜養朴がい〜〜此繪も此後い余良の  
源は郎強きよりもた〜い〜二幅も出来〜と極り〜  
見〜十里の好も凡さたのむけ〜〜ま〜のあを〜  
月のつ〜大車成あ〜よ〜目をつけてま〜人の手  
〜事〜を〜あ〜〜の目を〜人のあ〜〜  
事をあら〜す〜の體とい〜忠二丁より介随分せい〜  
それより介い〜もあ〜ぬ極のりのめを〜馬此脊た〜ひ〜

ゆきば一四七うち十里もゆくがごとくまづ終も唐絵より学んで一終をかく  
 人の名を見たりきみ芥子園と他之宣化畫譜津逮秘書のうちちぢる全篇之書孫  
 畫不畫繼後畫孫名畫孫八種畫譜画教圖終室鑑續圖終室鑑画  
 史丹書志南村先生字儀秘訣天子善孫の終之のこらひ之日此画畫終をとい  
 書物ゆりやうさきぬりの之終にあさしき終之又浮世終と英一蝶  
 形どし奥村政信多井清信羽川杯室懷月堂終とあるとも終の名人と  
 して西川祐信より介形西川祐信とあり世終此画と  
 びいどろといふもの崩撲といふ書と見え中国ともありらうやうを  
 昔とあるゆゑ又此の波斯國よりゆりあり世らうを糯米とい  
 ちらぬといふほどあやまりの形それいどろといふものよりそら  
 らぬといふを法秘といふぬ付をば白粉をわくといふ  
 是の形とら付あざむきともこの粉といふものと書くを備と  
 おひしてういふよとあれは白粉をやきとすりを今とありらうもの

いどろのうらを形どいけたらうと蠟燭をうそそ史くあて形をす修譜の  
 硝子といつげの横州いづまよりいづと長を弄今魚町とありらう店あり  
 群芳譜と見へはは芙蓉花のほろをう付ふたうは紅粉藍ありは  
 あいを筆より花れうもくといふいづと花の寢る特色のまわらう  
 とあり是も面白

前文脱

○ 女郎どもすくつふ事と大くそ客の目前あてあつらうといふ此大居  
 文盲あまばあぐ何中うあれ女希のうおけなき事をいそ終とおのよ  
 趣どく女郎と女希之命を命をとりやうと客をうらう事有たと志賀陽  
 といふ女希がいやといふといふ喜あまばあ客がひよのこころ時ふらう  
 といふ女希と候命ておさやをうらうこころ志賀陽といふ客をや事あり  
 たといふ文をうあまばあ今もあひのまありいふ客もいふはあひのす  
 りいふいふこころすてあまばあ客のう客さぬいふをむあまばああり

ある事とせしむるやうなる事をしていん履ある御も、いん履とて  
らまゝにまじりなれやうなるの御も、いん履とていん履と  
らむまゝにまじりなれやうなるの御も、いん履とていん履と  
むら志賀勝の御も、いん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と  
いん履とていん履とていん履とていん履とていん履とていん履と

此末は彼愚雅廻り記に生涯の学文を女婦の第一節に代んと  
してつがあらうべし強々せしむるにむ

安政五年三月十日流流賢一過

活東子

明治二十一年仲夏

筆者

妻木頼徳



